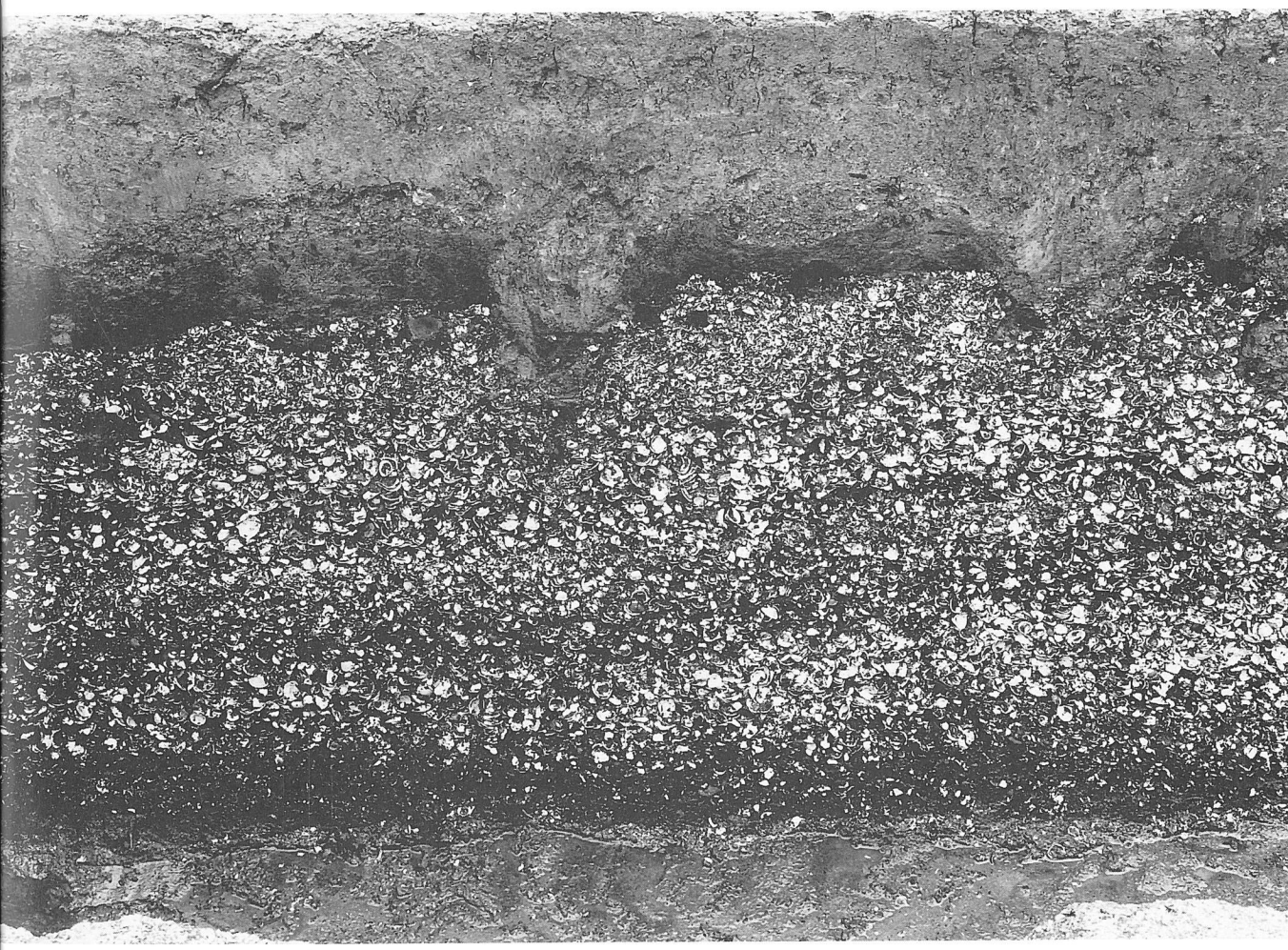
佐太講武貝塚発掘調査報告書 2



1994年3月

島根県鹿島町教育委員会

追録　佐太講武貝塚第６調査区出土の動物遺存体

（Ⅳ．動物・植物遺存体　内山純蔵）

ふるい選別資料

（B1～B8それぞれから土のう1袋分ずつ・計100ℓ）

網目(㎜)	綱名	種名	部位	左右	点数	部分	備考	写真
B1区								
5	哺乳類	ｲﾉｼｼ	鼻骨	左	1			
3	魚類	ｺｲ科	歯骨	右	1			
3	魚類	ｺｲ科	歯骨	左	1			※
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		5			
3	魚類	ﾀｲ類	歯		2			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		5	破片		
1	魚類	ｺｲ科	椎骨		1			
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		7			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		16			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		11			
B２区								
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		4			
5	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	中手・中足骨		1	遠位		
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		1			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		2			
3	魚類	ﾀｲ類	歯		7			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		3			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		4	破片		
1	魚類	ｲｼﾀﾞｲ	前上顎／歯骨		1			※
1	魚類	ｲﾜｼ類	椎骨		1			※
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		2			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		13			
1	魚類	ﾀｲ類	前上顎／歯骨		1			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		5			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		2	破片		
B３区								
5	魚類	ｸﾛﾀﾞｲ	前上顎骨	右	1			
5	魚類	ﾌﾅ	主鰓蓋骨	左	3			
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		1	破片		
5	哺乳類	ｼｶ	中手骨	左	1	遠位	横位に多くの切痕	
5	哺乳類	ｲﾉｼｼ	歯		1	Ｐ３？		
3	魚類	ｲﾜｼ類	椎骨		1			
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		2			
3	魚類	ﾀｲ類	歯		3			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		2			
3	魚類	ﾌﾅ	方骨	右	1			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		6	破片		
3	哺乳類	ﾀﾇｷ	歯	右	1	上顎M3		
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		1			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		2			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		2			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		5	破片		
B４区								
5	魚類	ﾅﾏｽﾞ	胸鰭棘	右	1		最大体長約34㎝（間接面幅6.2㎜）	※
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		4	破片		
5	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	中手・中足骨		1	遠位・滑車		
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		1			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		1			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		1	破片		
1	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
1	魚類	ｻﾊﾞ	前上顎骨	左	1			※

1	魚類	ﾀｲ類	歯板		1			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		1			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		11	破片		
1	哺乳類	ﾈｽﾞﾐ	犬歯		1			
B５区								
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		1	破片		
5	哺乳類	ｲﾉｼｼ	歯	左	1	犬歯下顎(ｽｽ)		
5	哺乳類	ｲﾉｼｼ	歯		1	M2またはM3		
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		1			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		1			
3	魚類	ﾀｲ類	鰭棘		1			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		1			
1	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		1			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		3			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		5			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		4	破片		
B６区								
5	魚類	ｺｲ科	歯骨	左	1			
5	魚類	ﾌﾅ	主鰓蓋骨	右	1			
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		10	破片		
3	魚類	ｺｲ	前鰓蓋骨	左	1			
3	魚類	ｺｲ科	歯骨	左	1			
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		1			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		27			
3	魚類	ｺｲ科	方骨	左	1			※
3	魚類	ｺｲ科	方骨	右	1			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		1			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		13	破片		
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		29			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		5			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		11			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		8	破片		
B７区								
5	魚類	ﾊｾﾞ	椎骨		1			
5	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			※
5	魚類	ｺｲ科	鰭棘		3			
5	魚類	ﾌﾅ	主鰓蓋骨	左	1			※
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		21	破片		
3	魚類	ｺｲ科	下尾軸骨		1			
3	魚類	ｺｲ科	角骨	右	1			
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		12			
3	魚類	ｺｲ科	方骨	左	1			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		4			※
3	魚類	ﾌﾅ	歯骨	右	1			
3	魚類	ﾌﾅ	歯骨	左	3			
3	魚類	ﾌﾅ	主鰓蓋骨		1			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		7	破片		
1	魚類	ﾊｾﾞ	歯骨	右	1			※
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		12			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		2			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		7			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		2	破片		
B８区								
5	魚類	ﾀｲ類	背鰭棘		1			
5	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
5	魚類	ﾀｲ類	鰭棘		1			

5	魚類	ﾌﾅ	主鰓蓋骨	左	1			
5	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		2	破片		
5	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	指骨		1			
5	哺乳類	ｲﾉｼｼ	臼歯		1	破片		
5	哺乳類	ｱﾅｸﾞﾏ	下顎骨		1			
3	魚類	ｸﾛﾀﾞｲ	歯板		1			
3	魚類	ｺｲ科	椎骨		2			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		10			
3	魚類	ｺｲ科	鰭棘		4			
3	魚類	ｺｲ科	方骨	右	1			
3	魚類	ﾀｲ類	歯		3			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		3			
3	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		4			
3	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		8	破片		
1	魚類	ｺｲ科	鰭棘		1			
1	魚類	ﾀｲ類	歯		5			
1	魚類	ﾌﾅ	咽頭歯		9			
1	魚類	ﾌﾅ	鰓蓋骨／頭蓋		6			

B地区現地取り上げ資料

（ふるい選別によらず、現地で取り上げ、登録番号を振ったもので、今回はB地区出土分のすべてを同定した。）

登録番号	綱名	種名	部位	左右	点数	部分	備考	写真
1154	魚類	ｸﾛﾀﾞｲ	歯骨	左	1		最大体長40cmと推定	※
665	魚類	ﾀｲ類	鰭棘		1			
1142	魚類	ﾀｲ類？	鰭棘		1			
462	哺乳類	ｲﾉｼｼ	下顎骨	右	1	M3歯根部		
485	哺乳類	ｲﾉｼｼ	下顎骨	右	1	下顎枝		
1385	哺乳類	ｲﾉｼｼ	寛骨	右	1			
414	哺乳類	ｲﾉｼｼ	距骨	左	1		ｲﾇ噛り痕・背面に切痕	
1235	哺乳類	ｲﾉｼｼ	犬歯	右	1		ｶｽ	※
662	哺乳類	ｲﾉｼｼ	歯	右	1	下顎1		
493	哺乳類	ｲﾉｼｼ	歯	左	1	下顎1		
596	哺乳類	ｲﾉｼｼ	上腕骨	左	1	遠位	切痕	
454	哺乳類	ｲﾉｼｼ	側頭骨	右	1		頭部前後最大長40cm	
456	哺乳類	ｲﾉｼｼ	側頭骨	右	1			
486	哺乳類	ｲﾉｼｼ	側頭骨	左	1			
629	哺乳類	ｲﾉｼｼ	中手・中足骨		1	第３／第４		
414	哺乳類	ｲﾉｼｼ	中手骨	左	1	第２		
408	哺乳類	ｲﾉｼｼ	橈骨	左	1	遠位		
413	哺乳類	ｲﾉｼｼ	橈骨	左	1	遠位		
1229	哺乳類	ｲﾉｼｼ	橈骨	左	1	中位	横位に多くの切痕	※
461	哺乳類	ｲﾉｼｼ	脛骨	右	1	遠位		※
631	哺乳類	ｲﾉｼｼ	脛骨	右	1	遠位		
380	哺乳類	ｼｶ	下顎骨	右	1	下顎枝		
446	哺乳類	ｼｶ	下顎骨	右	1	吻端		
457	哺乳類	ｼｶ	角		1	破片		
423	哺乳類	ｼｶ	角	右	1	第１枝	先端部磨き痕／基部切断痕	
451	哺乳類	ｼｶ	中手骨		1	中位		
435	哺乳類	ｼｶ	中足骨		1	近位		
405	哺乳類	ｼｶ	中足骨	右	1	近位	切痕	
404	哺乳類	ｼｶ	橈骨	右	1	中位		
1180	哺乳類	ｼｶ	橈骨	右	1	近位	ｲﾇ噛り痕	
1217	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	四肢骨		1	破片	ｲﾇ噛り痕	
1223	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	四肢骨		1	破片	切痕	
1153	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	椎骨		1			
417	哺乳類	ｼｶ/ｲﾉｼｼ	肋骨		1			

その他今回報告分

（B地区以外または出土地区不明分）

地区・登録	綱名	種名	部位	左右	点数	部分	備考	写真
1190	魚類	ｲｼﾀﾞｲ	歯骨	右	1			※
1122	魚類	ｺﾌﾞﾀﾞｲ	咽頭骨	下	1		歯板最大幅44.2㎜	※
1047	哺乳類	ｲﾇ	頭蓋骨		1	完形	頭頂部横位に切痕,計測値は表５	※
916	哺乳類	ｲﾉｼｼ	下顎骨	左	1	下顎枝～M3	M3摩耗度+,M3長36.8㎜,イ知噛り痕	※
627	哺乳類	ｲﾉｼｼ	肩甲骨	左	1		間接面最大前後幅36.6㎜	※
596	哺乳類	ｲﾉｼｼ	上腕骨	左	1	遠位	前面外側に切痕	※
121	哺乳類	ｲﾉｼｼ	頭蓋骨		1	吻端・後頭欠	M2長22.7㎜,M3長35.2㎜	※
45	哺乳類	ｼｶ	下顎骨	左	1	吻端～M2	P2～P4長36.1㎜,M1～M2長33.4㎜	※
50	哺乳類	ｼｶ	角	右	1		角坐部内側から切断,切痕あり	※
140	哺乳類	ｼｶ	寛骨	右	1		間接面最大径47.0㎜	※
734	哺乳類	ｼｶ	肩甲骨	左	1		間接面最大前後幅46.5㎜	※
1086	哺乳類	ｼｶ	上腕骨	右	1	遠位	間接面最大横径47.2㎜	※
253	哺乳類	ｼｶ	中手骨	左	1	中位		※
1210	哺乳類	ｼｶ	頭蓋骨		1	頭頂部	ﾒｽ,後頭部左側欠損	※
883	哺乳類	ｺﾎﾝｻﾞﾙ	下顎骨		1	左右揃い		※
17層-A10	魚類	ｸﾛﾀﾞｲ	歯骨	右	1		推定最大体長46.8㎝	※
50層-C14	魚類	ｻﾒ類	椎骨		1			※
G2	哺乳類	ﾋﾄ	大腿骨	左	1		幼（胎児または新生児）	※
不明	哺乳類	ｲﾉｼｼ	下顎骨	左	1	下顎枝		
不明	哺乳類	ｲﾉｼｼ	側頭骨	右	1		側頭骨幅から頭蓋最大長約40㎝	
不明	哺乳類	ｼｶ	脛骨	左	1	遠位		

その他、アカエイ尾棘１点も出土している。

佐太講武貝塚第６調査区出土の動物遺存体

佐太講武貝塚発掘調査報告書２追録

1995年１月

佐太講武貝塚（さだこうぶかいづか）
発掘調査
報告書2

目次

例言
1 …… Ⅰ．調査の経過
2 …… Ⅱ．位置と歴史的環境
4 …… Ⅲ．調査の概要
4 …… 第1調査区
6 …… 第2調査区
6 …… 第3調査区
7 …… 第4調査区
7 …… 第5調査区
8 …… 第6調査区
20 …… 第7調査区
21 …… 第8調査区
21 …… 第9調査区
23 …… 第10調査区
23 …… 第11調査区
25 …… Ⅳ．出土動物・植物遺存体
32 …… Ⅴ．小結

例　　言

1．本書は、鹿島町教育委員会が平成５年度に島根大学汽水域研究センターの協力を得て、国庫補助事業として実施した佐太講武貝塚の発掘調査の記録である。

2．調査地所在地と、ご協力いただいた土地所有者のご芳名は以下のとおりである。土地所有者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。（敬称略）

調査区	所　在　地	土地所有者	調査区	所　在　地	土地所有者
1	鹿島町大字佐陀宮内679-1	安　達　俊　夫	7	鹿島町大字佐陀宮内674-1	井　山　浩　一
2	〃　953-1	中　村　勝　弥	8	〃　677-1	藤　井　和　夫
3	〃　678-2	〃	9	〃　676-1	安　達　哲　也
4	〃　〃	〃	10	〃　673-2	中　村　勝　弥
5	〃　676-1	安　達　哲　也	11	〃　673-1	長谷川　美和子
6	〃　674-1	井　山　浩　一			

（１～２は史跡指定地外、３～11は史跡指定地内の調査区）

3．調査は平成６年１月10日から平成６年３月26日まで実働56日をかけて実施した。調査体制は以下のとおりである。

事　務　局　　曽田　稔（鹿島町教育委員会教育次長）
　　青山俊太郎（　同　　社会教育係長）
　　赤沢秀則（鹿島町教育委員会主任主事）

調査指導　　田中義昭（島根大学法文学部教授）
　　山本　清（島根大学名誉教授）
　　石井　悠（鹿島町中学校教諭）
　　川原和人（島根県教育庁文化課）
　　足立克己（島根県教育庁文化課）
　　熱田貴保（島根県教育庁文化課）
　　潮見　浩（広島大学名誉教授）
　　増淵　徹（文化庁文化財保護部記念物課）
　　松井　章（奈良国立文化財研究所主任研究官）

調　査　員　　赤沢秀則（鹿島町教育委員会主任主事）
　　竹広文明（島根大学汽水域研究センター助手）
　　宮田健一（鹿島町教育委員会嘱託）

調査補助員　　石橋淳一、川谷房光、染次秀一、青山聖之、水口晶郎

作　業　員　　川下晴夫、安達善也、中村　豊、新宮嘉夫、井上一栄、長廻美江子、加藤和枝

遺物整理員　　中島美喜子（鹿島町立歴史民俗資料館）、瀬田明子、加藤和枝

4．本書は、調査を担当した竹広と赤沢が協議して編集、執筆した。ただし、第Ⅳ章については京都大学大学院内山純蔵氏から玉稿を賜わった。

5．調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関にご協力・ご指導を賜わった。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

井上智博(大阪文化財センター)、内山純蔵(京都大学大学院人間・環境学研究科)、大西郁夫(島根大学理学部)、菊池直樹(高知大学学生)、澤田　勝(奈良大学大学院)、島根県埋蔵文化財調査センター、島根大学汽水域研究センター、新海正博(大阪文化財センター)瀬口眞司(財団法人滋賀県文化財保護協会)、徳岡隆夫(島根大学理学部)、中川治美(財団法人滋賀県文化財保護協会)、中村友博(山口大学)、丹羽野裕(島根県埋蔵文化財調査センター)、間壁忠彦(倉敷考古館)、道岸史子(同志社大学学生)、柳浦俊一(島根県埋蔵文化財調査センター)、矢野健一(立命館大学)、渡辺貞幸(島根大学)

Ⅰ．調査の経過

史跡佐太講武貝塚は、昭和８年の指定以来現在まで保護されてきたが、指定後調査は行われておらず、貝層の広がり、周辺遺構の状況などは確認されていない。よって、遺跡の正確な範囲、性格等を把握するため、部分的な発掘調査を実施し、遺跡の保護・活用に資する資料を得ることを目的に調査を計画した。また、大字名分側では、指定地の中心を県道松江鹿島美保関線が通っている部分もあるため、近年の交通量の増大に対応できなくなってきてもいる。こうした面からも基礎資料を得る調査が急がれた。

史跡指定地は、大字佐陀宮内と大字名分にまたがる。昨年度の調査では、大字名分側において指定地および指定地周辺の発掘調査を行い、昭和８年の史跡指定以来行われたことのない調査を実施したが、発見した貝塚貝層は、江戸時代運河佐陀川が開削された際に運び揚げられた揚土に含まれた擬貝層と判明し、貝塚本体は、大字佐陀宮内側に存在することが予想される調査結果となった。

こうして、平成６年度においては、大字佐陀宮内側において、貝塚貝層の存在の確認と、関連遺構の検出を目的に平成５年度の国庫補助事業として、約131㎡を対象に実施することとした。

指定地外の部分については、平成５年10月25日付けの発掘調査通知書を提出し、指定地内の調査区については、平成５年10月26日付けで現状変更許可申請書を提出、同11月30日付けで現状変更許可を得、翌６年１月10日調査に着手した。また、調査に際しては、島根大学汽水域研究センターとの共同事業として、同センターから、竹広文明助手の派遣を得た。

調査では、昨年度同様、運河佐陀川が開削された際に運び揚げられた揚土が堆積する部分も存在したが、第６調査区において、厚さ約１ｍに達するヤマトシジミを主体とする貝層を検出するなど、貴重な成果を上げて、目的の一端を果たすことができた。また、第６調査区周辺の調査区では、縄文時代の包含層も検出した。

第６調査区で検出した貝層は、幅１ｍで断ち割り、掘り上げた貝は水洗選別を行うため、すべて搬出した。土嚢で約600袋となった。

調査は、冬季の不順な天候のもとで行なわざるをえず、困難であったが、３月26日、無事撤収までを完了した。

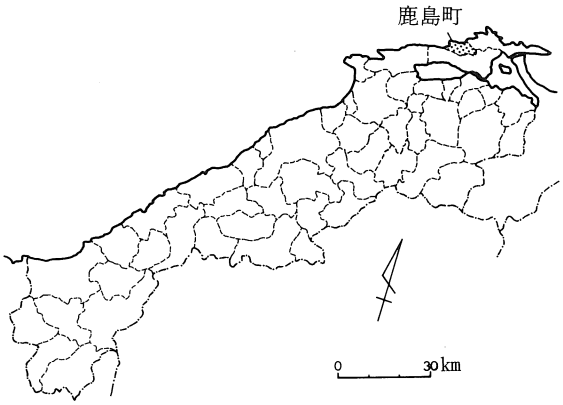


図１．鹿島町位置図

Ⅱ．位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、半島部では持田・川津平野とならぶ広い耕地を持ち、その水田は180haに及ぶ。この盆地は谷奥から流れだす講武川によって運ばれた土砂による沖積地で、肥沃な耕作地となっている。

佐太講武貝塚は、この盆地の西端に位置する。遺跡は江戸時代の運河佐陀川によって分断され、東側が旧講武村、西側が旧佐太村に含まれたことから、佐太講武貝塚と命名された。

この盆地内および鹿島町域内での縄文時代の様子は佐太講武貝塚[1]を除いて、いまだよく判明していない面があるが、北講武氏元遺跡[2]で、後期の土器片少量と晩期系の土器群が出土しており、さらに縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。佐太講武貝塚は、貝の散布範囲が指定を受けているのみで、当時の集落そのものの範囲などはいまだ明らかでない。貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水産のものはわずかである。このことは、この貝塚が形成された当時、この周辺部が潟湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この潟湖は、後の『出雲国風土記』にいうところの「佐陀水海（さだのみずうみ）」、「恵曇陂（えとものつつみ）」の前身と考えられ、こうした湿地帯からヤマトシジミを主とする魚介類を採取し、周辺の山野に堅果類や鳥獣を求めていたものと思われる。

弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晩期系の土器と弥生時代前期の土器がともに出土しており、この講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが知られる。また、大字古浦の古浦砂丘遺跡[3]では、前期の集団墓地が調査されている。盆地西南端にも弥生前期からの佐太前遺跡[4]が存在する。この盆地からは離れるが、「恵曇陂」の南岸の山懐には、銅鐸、銅剣を埋納した志谷奥遺跡[5]がある。再び盆地内では、中期の遺物を出土した名分塚田遺跡[6]、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡[7]が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系の土器が大量に供献されていた木棺墓群、南講武草田遺跡[8]が知られてきている。

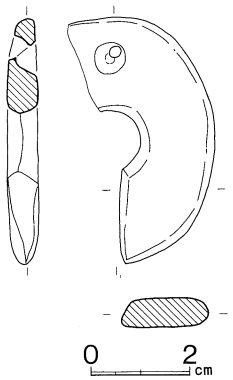
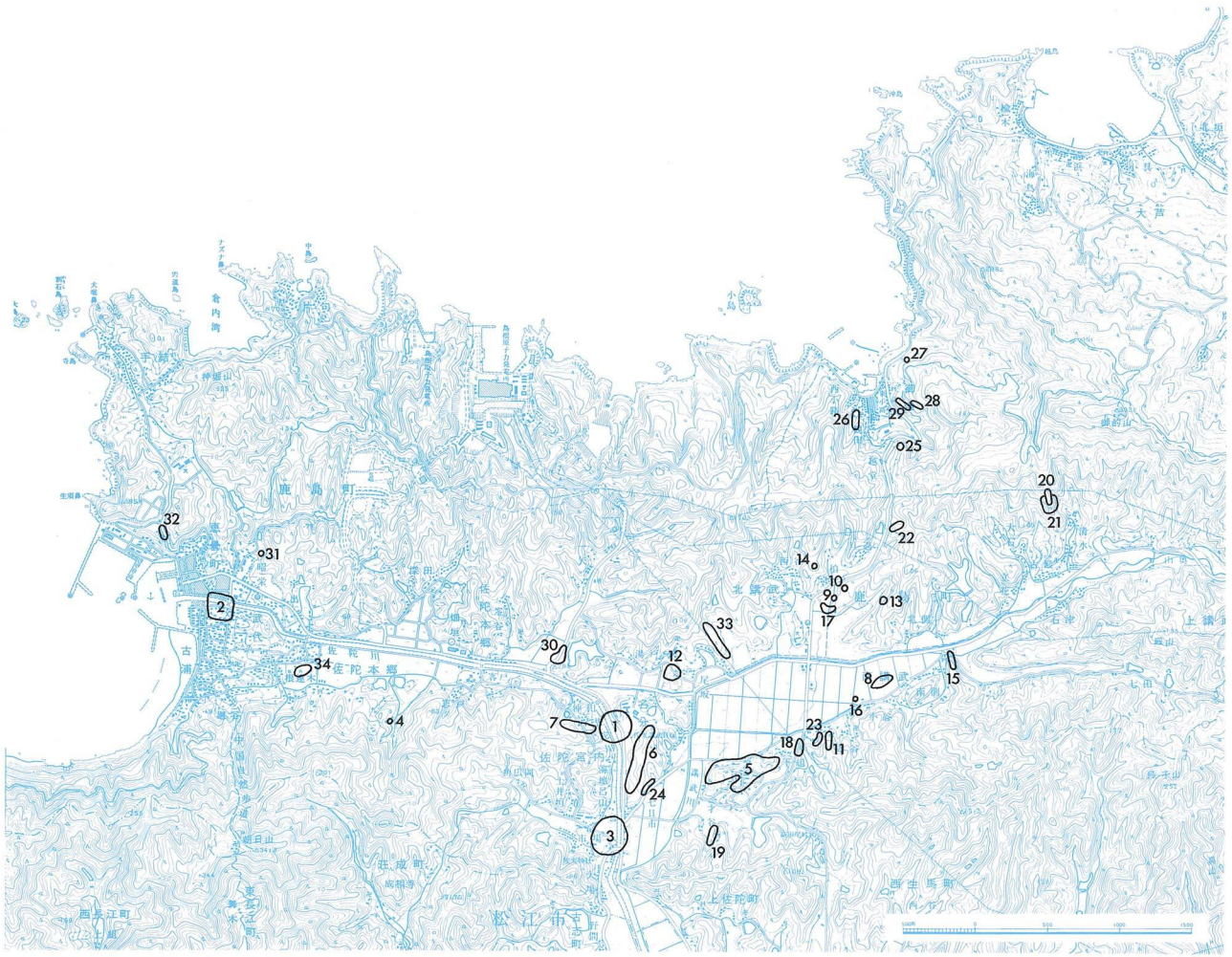


図２．佐太講武貝塚
出土玦状耳飾

この地が古墳時代を迎えると、名分丸山古墳群[9]、奥才古墳群[10]、鵜灘山古墳群[11]など前半期にさかのぼる古墳群が知られ、北講武地区にはこれらに引き続く後半期の古墳が知られてきている。これら以外にも、横穴墓が多数知られており、その分布から古墳時代後期の段階には、現在の集落の原形ができあがるものと考えられる。



1. 佐太講武貝塚
2. 古浦砂丘遺跡
3. 佐太前遺跡
4. 志谷奥遺跡
5. 奥才古墳群
6. 鵜灘山古墳群
7. 面目古墳群
8. 南講武草田遺跡
9. 雉ケ崎荒神古墳
10. 向山古墳
11. 中尾谷山古墳群
12. 藤山古墳・藤山遺跡
13. 堀部古墳
14. 岩屋古墳
15. 多久神社裏古墳群
16. 南講武小廻遺跡
17. 北講武氏元遺跡
18. 南講武大日遺跡
19. 嵐廻横穴群
20. 寺の奥古墳群
21. 寺の奥横穴群
22. 恵谷横穴群
23. 清水の奥横穴群
24. 名分塚田遺跡
25. 的松古墳
26. 秋葉山古墳群
27. 御津中の津古墳
28. 御津貝塚横穴群
29. 御津茶畑横穴群
30. 名分丸山古墳群
31. 狐堀古墳
32. 寺尾横穴群
33. 尾坂古墳群
34. 稗田遺跡

図3．佐太講武貝塚と周辺の遺跡（1/50,000）

Ⅲ．調査の概要

史跡指定地は、大字佐陀宮内と大字名分にまたがる。昨年度の調査では、大字名分側において指定地および指定地周辺の発掘調査を行い、昭和８年の史跡指定以来行われたことのない調査を実施し、貝塚貝層、関連遺構の検出につとめたが、発見した貝塚貝層は、江戸時代に運河佐陀川が開削された際に運び揚げられた揚土に含まれた擬貝層と判明し、貝塚本体は、大字佐陀宮内側に存在することが予想される調査結果となった。

こうして、平成５年度においては、大字佐陀宮内側において、貝塚貝層の存在の確認と、関連遺構の検出を目的に実施することとした。調査面積は、約131㎡である。

調査では、佐陀川西岸の水田面でできるだけ縦横に直交する形に調査区を配置した。昨年度同様、運河佐陀川が開削された際に運び揚げられた揚土が堆積する部分も存在し、第２調査区のように運河掘削の工程をかいま見せる調査区もあった。

第６調査区では、厚さ約１ｍに達するヤマトシジミを主体とする貝層を検出し、目的の一端を果たすことができた。また、第６調査区に隣接する第５、第７、第９調査区において、貝層は認められなかったものの、遺物包含層をそれぞれ検出し、佐陀川の開削やその後の農作業などによってかなりの地形の改変はあるものの、縄文時代当時の遺構も残存する部分があることを明らかにすることができた。当初、調査目的の一つにあげた当時の集落など生活址の検出は果たせなかったが、第９調査区で検出されたような遺物包含層がその一端をかいま見せるものと考えられる。

第６調査区で掘り上げた土嚢約600袋の貝は、調査と並行して水洗選別を開始し、その成果の一部を第Ⅳ章に掲載した。将来的には、すべて水洗選別を行う予定である。

また、第６調査区の貝層および第９調査区の遺物包含層において、遺物の取上げに際しては、島根県立埋蔵文化財調査センターから遺跡探査システムの貸与を受けて調査を行った。厚くお礼申し上げる。

第１調査区

佐陀川西岸の谷奥部水田面に設定した３×２ｍの調査区で、地表の標高は6.6ｍである。耕作土下には粘質土がほぼ水平に堆積しており、後述する第２、３、４調査区のような佐陀川開削時の揚土はここでは認められなかった。出土遺物はなかったが、調査区最下層の淡灰褐色粘土層から獣骨が１点出土した。

図４．佐太講武貝塚調査区配置図（1/5,000）

第２調査区

佐陀川西岸の丘陵東斜面に設定した7.5×２ｍの調査区で、地表の標高は12.8～10.6ｍである。表土下は有機土、粘質土、砂質土がブロック状に堆積しており、低湿地の土砂を運び上げたものと考えられる。この土砂は斜面上方で約１ｍ、下方では２ｍの厚さに堆積している。昨年度の調査での知見のように、佐陀川開削時の揚土と判断する。揚土下面は、黄褐色の砂礫質の地山となるが、この上面には旧表土が認められないこと、斜面下方では深くえぐり取ったような状況を呈することから、佐陀川開削時にこの地点で丘陵を削って工事用の土砂を採取し、その跡地に掘削にかかる揚土を搬入したものと考えられる。揚土中から土師質土器片２片が出土した。

第３調査区

第１調査区の東約15ｍに設定した５×２ｍの調査区で、地表の標高は6.2ｍである。ここでは第２調査区同様、耕作土下には佐陀川開削時の揚土と考えられる有機土、粘質土が堆積

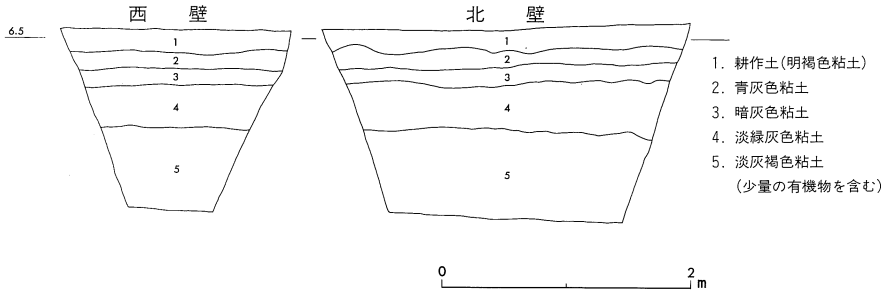


図５．第１調査区（1/60）

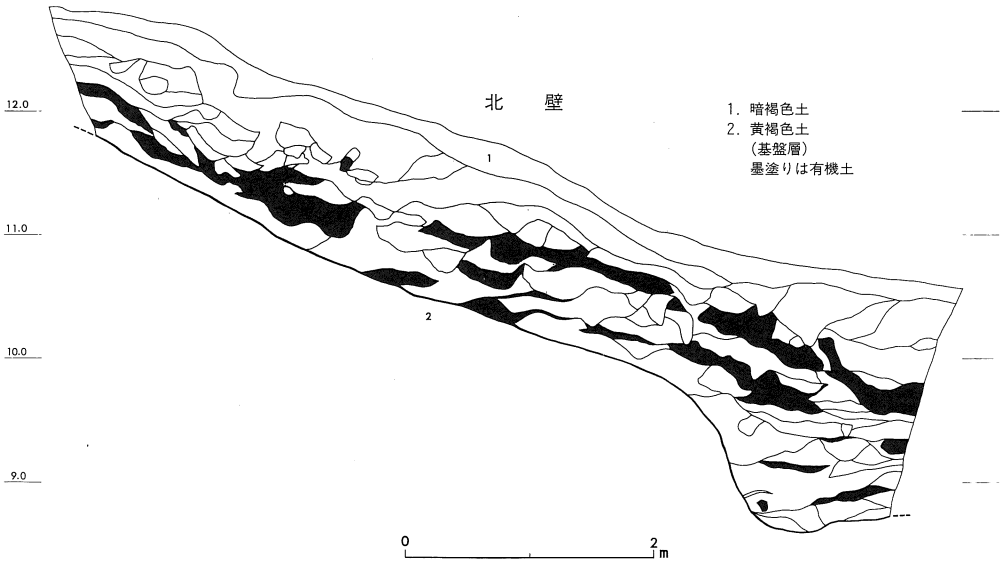


図６．第２調査区（1/60）

している。この調査区での揚土の厚さは約１ｍで、上、下面の標高はそれぞれ6.0、5.0ｍである。この揚土層の下には、旧耕作土は認められず、昨年の調査でも注意されたことであるが、揚土搬入前に耕作土を除去する工事が行われている可能性がある。この調査区の揚土には貝などは含まれていなかった。揚土の下には淡緑灰色粘土、淡灰褐色粘土がある。

この調査区からの出土遺物はない。

第４調査区

第３調査区の東約30ｍに設定した３×２ｍの調査区で、地表の標高は5.6ｍである。この調査区でも耕作土下には佐陀川開削時の揚土と考えられる有機土、粘質土が堆積している。この調査区での揚土の厚さは約0.8ｍで、上、下面の標高はそれぞれ5.5、4.7ｍである。その下層には淡褐色粘土、淡緑灰色粘土、淡灰褐色粘土があり、淡褐色粘土中には木杭４本が打ち込まれていたが、この杭の年代は伴う遺物がなく明らかにできなかった。

この調査区の揚土中には少量ではあるが、貝が含まれていた。貝の中には縄文土器などを包含するので、貝塚本体を運河掘削に際して掘り上げたものと考える。

第５調査区

第４調査区の東約35ｍに設定した３×３ｍの調査区で、地表の標高は3.4ｍである。ここでは佐陀川開削時の揚土は認められなかった。上層にある暗褐色粘土層からは弥生土器が１片、下層の淡緑灰色砂質粘土には、撚糸文のある縄文時代中期の土器が含まれ、その下層の淡灰色

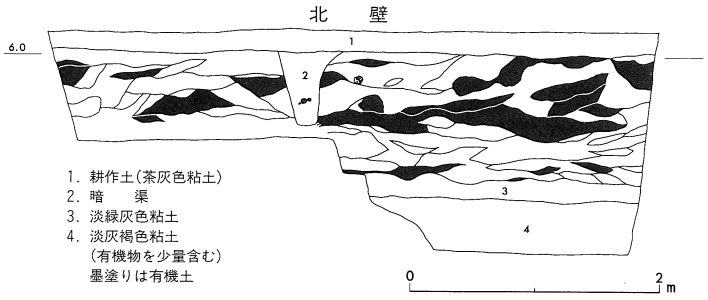


図７．第３調査区（1/60）

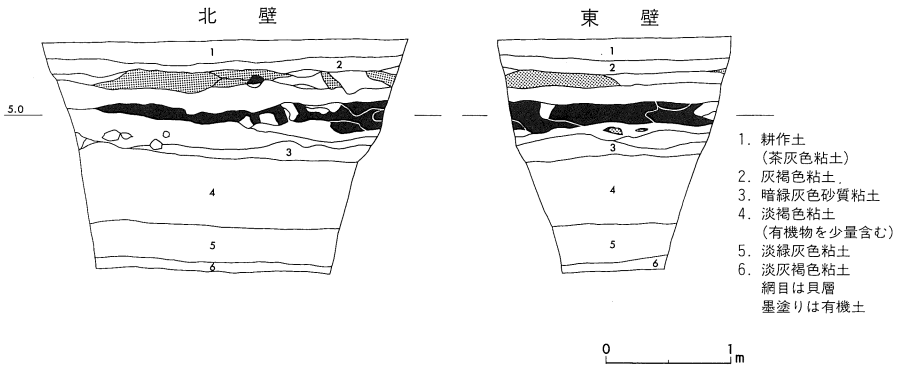


図８．第４調査区（1/60）

粘土には条痕文のある縄文時代前期の土器が含まれていた。この層序と遺物の構成は、後述する第6調査区の有機土層と貝層の関係とよく対応している。

出土遺物1は弥生土器底部片で、形態や大粒の砂粒を含むことから弥生時代前期のものと考えられる。2は縄文土器で、外面に撚糸文をもつ。中期のものであろう。3も縄文土器である。外面は横ナデで仕上げ、内面には横方向の条痕をとどめる。前期の深鉢であろう。

第6調査区

佐陀川西岸に面した水田に設定した10×2mの調査区で、地表の標高は1.5mである。この調査区は、以前川岸に貝層が露出していた地点にあたり、山本清氏が作製した測量図をもとに、調査区を決定した。約20cmの厚さの表土(耕作土)を剥ぐと、ほぼ全体に貝層が広がっていた。また、地形

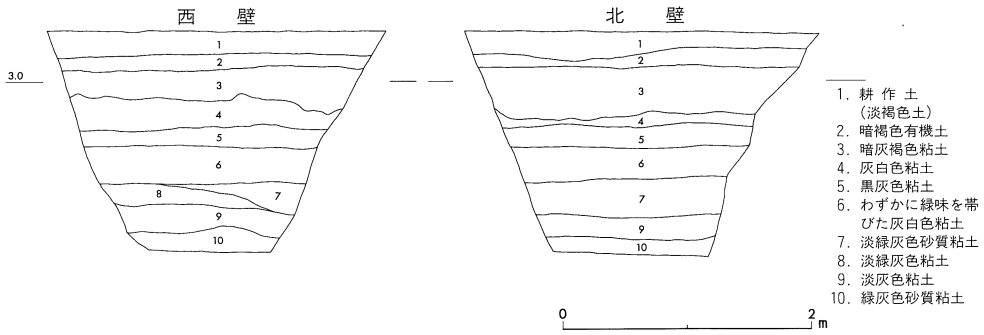


図9. 第5調査区 (1/60)

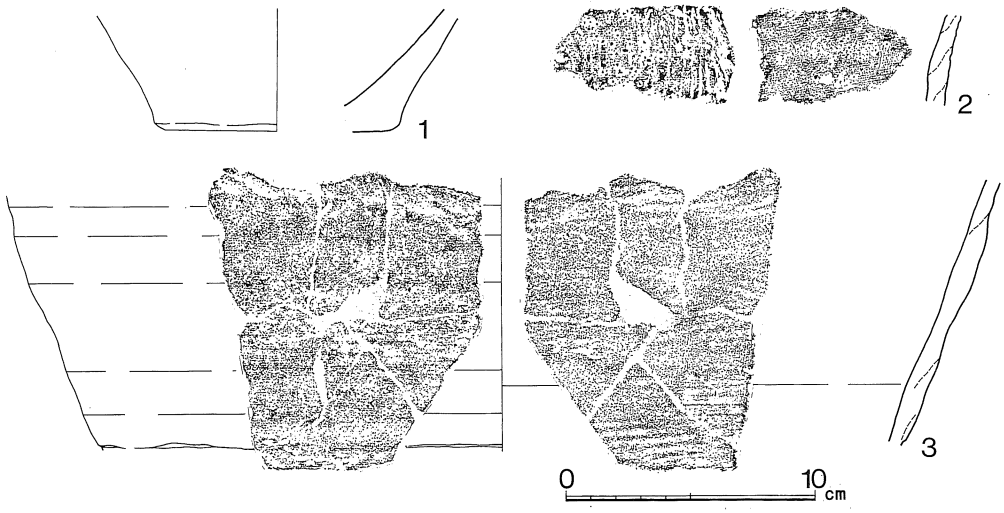


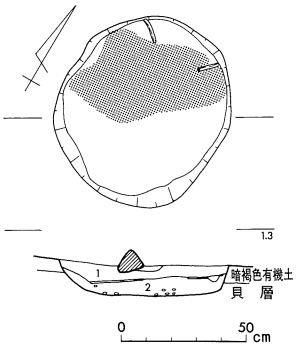
図10. 第5調査区出土遺物 (1/3)

としては、南西から北東に向けてゆるやかに傾斜しているが、水田造成により水平に削平されたため、上手側の調査区南端部ではすでに地山が露出しており、下手側の調査区北端部では貝層上に暗褐色有機質土層が堆積しているのが認められた。なお、調査区北端部では、暗褐色有機質土層を掘込んでつくられた貯蔵穴が１基認められた。

（１）貯蔵穴および暗褐色有機質土層の調査　貯蔵穴(図11)は、平面形が径70cmのほぼ円形の土坑を掘ったものであり、土坑の上部はすでに削平されており、深さが現存で15cmしかないが、下底には約100粒以上の木の実が残存していた。貯蔵穴の掘込み面は不明であり、時期の特定はできないが、これは暗褐色有機質土層を掘込んでおり、同層が縄文時代中期の遺物包含層であることから、少なくとも中期以降のものであろう。

暗褐色有機質土層は、貝層上に堆積した、木片、葉などの植物遺体に富んだ土層である。この層からは縄文時代中期の撚糸文土器(図12) が出土しており、１個体に復元されるようである。

（２）貝層の調査　貝層は、調査区の南端をのぞく、ほぼ全域17.5㎡の範囲に広がっていたが、掘り下げは、東半１ｍ幅の範囲で行った。調査にあたっては、まず東壁沿いに先行トレンチを掘って土層を確認したのち、残りの部分で層位的な発掘を行なった。なお、先行トレンチ、本トレンチともに、貝層の断ち割部分については土壌、



1．淡褐色粘土
2．青灰色粘土

図11．第６調査区貯蔵穴 (1/30)

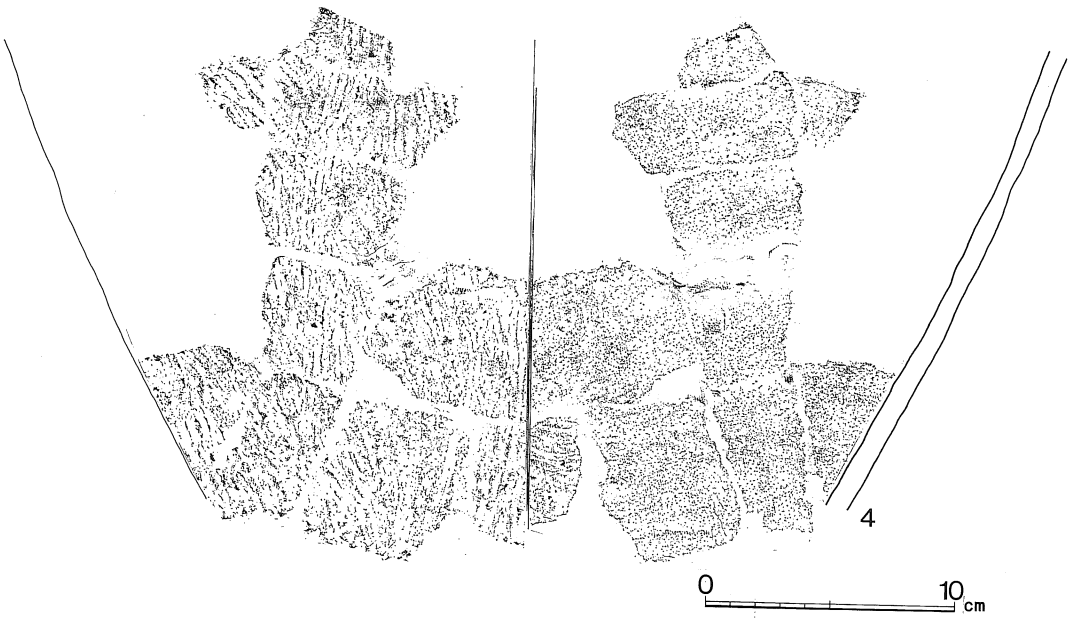


図12．第６調査区出土遺物 (1;1/3)

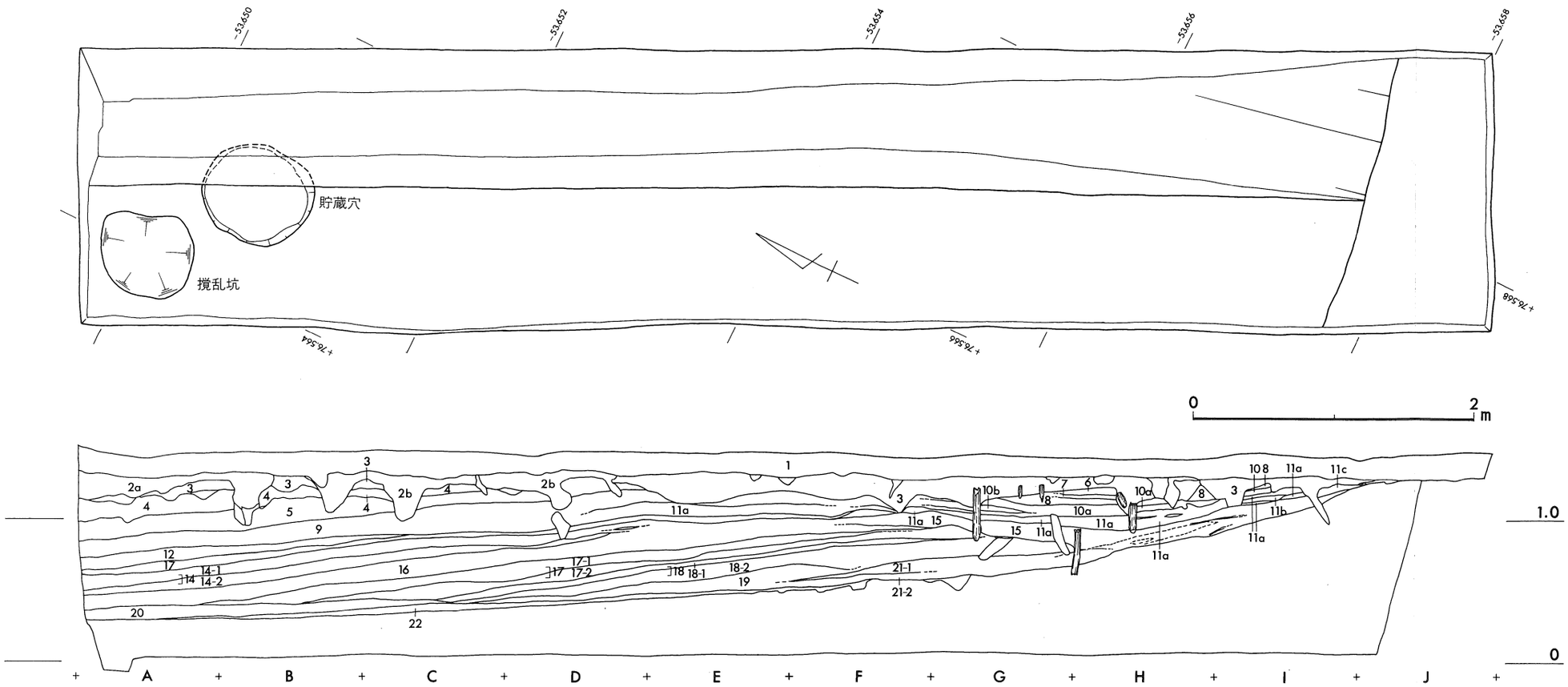
貝類などをすべて層位的に回収し、水洗選別を行なうことにした。サンプリングにあたっては、調査区内を１ｍ単位で北からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ…Ｉに区分けし、区ごとにサンプリングを行ない、また、レベル的には、ほぼ５㎝程度掘り下げるごとに、例えばA1、A2、A3…と番号をつけてサンプリングした。本トレンチ部分については、これに層位を加えて1層－A1、1層－A2、2層－A3…と番号をつけた。こうしてサンプリングした土壌、貝類は、土のう約600袋であり、また、低湿地の遺跡のため有機質遺物も遺存しており、貴重な資料が得られた。

貝層(図13)は、南から北に下るゆるやかな斜面上に形成されており、貝層の上面が確認できた調査区北端部では70㎝前後の厚さである。貝層の形成の概略をしめすと、地山の傾斜がゆるやかである北半部を中心に地山上に暗灰褐色砂層(第22層)が堆積し、さらに北端部には砂層上に木の実殻などの有機物をふくむ砂層(第20層)が認められる。貝層は、まず地山の傾斜がゆるやかに変換するＧ区付近を中心に形成され始め、堆積が進むにつれてしだいに下手である北に貝層がのびている様子がよく分かる。また、貝層の主体はヤマトシジミであるが、このほかの海産貝類、獣骨、木の実殻も認められ、特に木の実殻は密集して層をなしている部分もみられた。また、斜面上手である貝層南部では、灰層、焼土層の互層となっており、火処となっていたことがわかるが、これらの層は、貝層とともに形成が進んでおり、斜面上手側に調理などの活動の中心があり、下手側が廃棄の場所となっているようである。なお、貝層中には黄褐色粘土層が少なくとも３枚みられるが、遺存状況の良い第11層では、この層にそって直下の貝が圧力を受けて細かく砕けていた。おそらく貝層の形成の中途で、貝層上に粘土をはりつけ活動しやすいようにしたものと考えられる。

（３）遺物出土状況および出土遺物　発掘時に出土した遺物には、縄文土器、石器、獣骨、魚骨、貝類、堅果類などがある。また、現在サンプリングした土壌の水洗選別および整理作業が進行中であり、資料の内容および量も増えつつあるが、ここでは発掘時に得られた資料を対象として報告しておきたい。なお、獣骨など自然遺物については、別章で記載されるので、ここではふれない。

縄文土器(図15、16)　貝層以下出土の土器には、地文に二枚貝条痕もしくはナデ調整をもつ土器(５～17、21～24)および縄文をもつ土器(18～20)があり、器形については、全形を復元できるものは今のところないが、単純な深鉢形を呈するようである。これらはいずれも前期の土器と考えられる。この内外面に文様を施した土器は少なく１割にも満たない。なお、図14には、第６調査区出土土器の垂直分布状況を示してあり、挿図に掲載した資料については、遺物番号を分布図に付けておいた。

５、６は、隆帯文土器であり、５は口縁に平行に断面三角形状の隆帯を貼り、口唇に刻み目を施しており、６は胴部片であるが、隆帯を縦位と横位に施しており、全体にやや磨滅気味である。８～11は、刺突文および爪形文土器であり、８は刺突を少なくとも２段にわたり施しており、９はＤ



1層……茶褐色粘質土(耕作土)
2層 a……黄灰色粘質土
　b……淡茶灰色粘質土
3層 a……黄褐色砂質粘土
　b……小貝片層
　c……小貝片層
4層……暗褐色有機質土層
5層……混土貝層(貝は砕けたもの多く、有機物混じる)
6層……黄褐色混貝土層(粘土、焼土混じる)
7層……木炭、灰混り混土貝層
8層……黄褐色混貝土層(粘土混じる)
9層……混土貝層(貝は完形のもの多い)
10層 a……木炭、灰混り混土貝層
　b……黄褐色混貝土層(粘土混じる)
11層 a……黄褐色粘土層(北にいくにつれ貝を多く含む)
　b……木炭層
　c……黄褐色粘土層
12層……有機物(木の実殻片)混じり混土貝層(11層 a の下部では貝が細かく破砕されている)
13層……暗灰色混土貝層(破砕した貝多く、砂混じる)
14層－1……暗灰色混土貝層(貝は完形のもの多い)
　－2……有機物(木の実殻片)混じり混土貝層(D 区以南では有機物少なく、砂が目立つ)
15層……粘土混じり貝層(黄褐色粘土、木炭層の互層がみられ、南半貝少なくなる。11層 a 下部では貝が細かく破砕されている)
16層……暗青灰色混土貝層
17層－1……有機物(木の実殻片)混じり混土貝層
　－2……暗緑灰色混貝土層(砂混じる)
18層－1……有機物(木の実殻片)混じり混土貝層
　－2……黒褐色混土貝層(砂混じる)
19層……暗緑灰色混土貝層
20層……有機物(木の実殻片)を多量に含む砂層
21層－1……有機物(木の実殻片)多い混土貝層(南端部は貝少なくなり、木炭、灰、焼土の互層となる)
　－2……暗緑灰色混土貝層
22層……暗灰褐色砂層(北端部では断続的に存在する)

図13. 第 6 調査区平・断面図 (1/40)

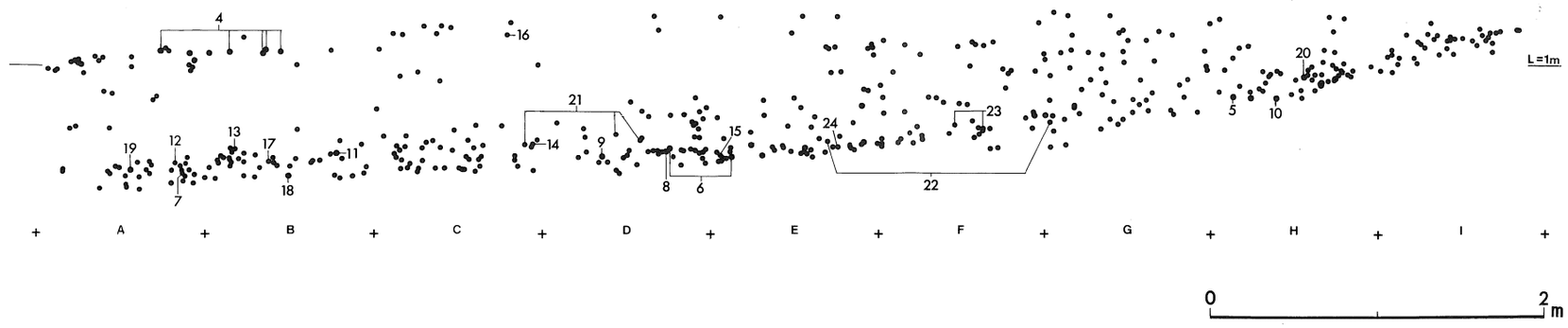


図14. 第 6 調査区遺物出土状況垂直分布図 (1/40)

字爪形文、10は逆C字爪形文を施している。11は小破片であるが、C字爪形文帯の縁を沈線で区画しているのが確認でき、表裏ともナデ調整をほどこした薄手の土器である。7、21は沈線文土器であり、7は口縁部に横位に多条の沈線を施した土器であり、口唇部に刻み目があり、21は、半截竹管状の工具の内側をあて、縦位に2条の平行沈線を間隔をおいて施した土器である。12～17、22～24は、二枚貝条痕もしくはナデ調整で仕上げられた土器であり、この内、13、16、17、23は口唇部に刻み目がある。18～20は、外面に縄文を施し、内面には二枚貝条痕もしくはナデ調整を施した土器であり、18は波状口縁で口唇部に刻み目があり、LRの縄文を施しており、19、20は羽状縄文を施している。

石器(図17、18)　貝層以下から出土した石器には、剥片石器、磨製石斧、台石、磨石、石錘などがある。剥片石器の石材は、黒曜石25、26、29～31が多いが、サヌカイト28、頁岩27、安山岩、玉髄、チャートなども認められた。

25、26は、凹基無茎式石鏃で、いずれも両面全体にわたって加工が施されており、それぞれ0.3g、0.5gである。27は、縦型石匙で、おもに主要剥離面側から加工を施し、縦長状の剥片の末端側につまみを設けており、6.3gである。28は、刃器(スクレイパー)で、横長状の剥片の末端側に背面から加工を施し刃部をつくっており、89.8gである。同様の形態のサヌカイト製刃器がもう1点出土している。これらの素材剥片は、いずれも瀬戸内技法による翼状剥片に類似するが、縄文時代のものである。29は、石錐で、素材剥片の一端に両面から加工を施して、断面三角形の錐部をつくりだしており、3.9gである。30は、楔形石器で、一側面は截断面となっており、5.7gである。31は、石核であり、打面と作業面を比較的固定して、おもに正面側で剥片剥離を行なっており、裏面および正面の一部には自然面をとどめている。25g。32、33は、いずれも長軸を打ち欠いた石錘であり、それぞれ124g、181gである。34は、磨製石斧であり、基部は欠損している。35は、磨石であり、下端には敲打痕が認められ、540gである。36、37は、石皿の破片であるが、いずれも多孔質の石材を使っている。

貝製品および骨角・歯牙製品(図19)　38～40は貝輪で、38、39はベンケイガイかと考えられる二枚貝を加工したもので、表面は肋条の凹凸がなくなるまですり消している。40も貝輪であるが、細身のものである。41は、コブダイの歯を抜き、歯根部に穿孔した垂飾品と考えられる。42は鹿角の先端を半截し、両面を研磨して板状に仕上げたものである。43～45は単純刺突具(ヤス)であるが、いずれも両端をとがらせ、わずかに一端を屈曲させる特徴をもっている。このような形状は中国地方に広くみられる。43はシカ中手骨、44は獣骨、45は鹿角製である。なお、平成4年度資料中には、サルの下顎歯(M2左)を半截し、穿孔した加工品もあり、41とともに全国的にも珍しい。

(4)若干の考察　佐太講武貝塚出土の土器については、採集資料によるものであるが、山本　清

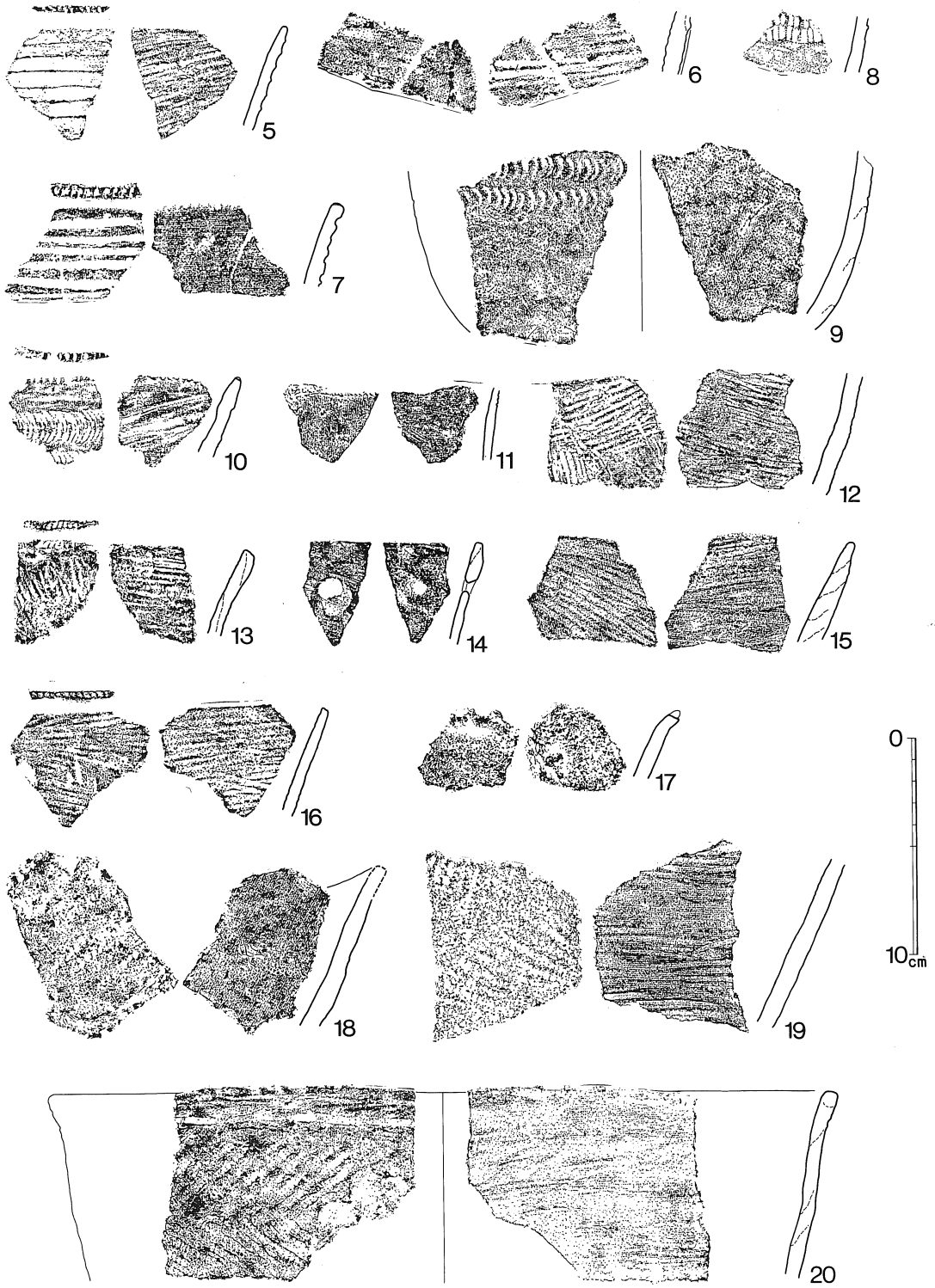


図15. 第6調査区出土遺物（2;1/3）

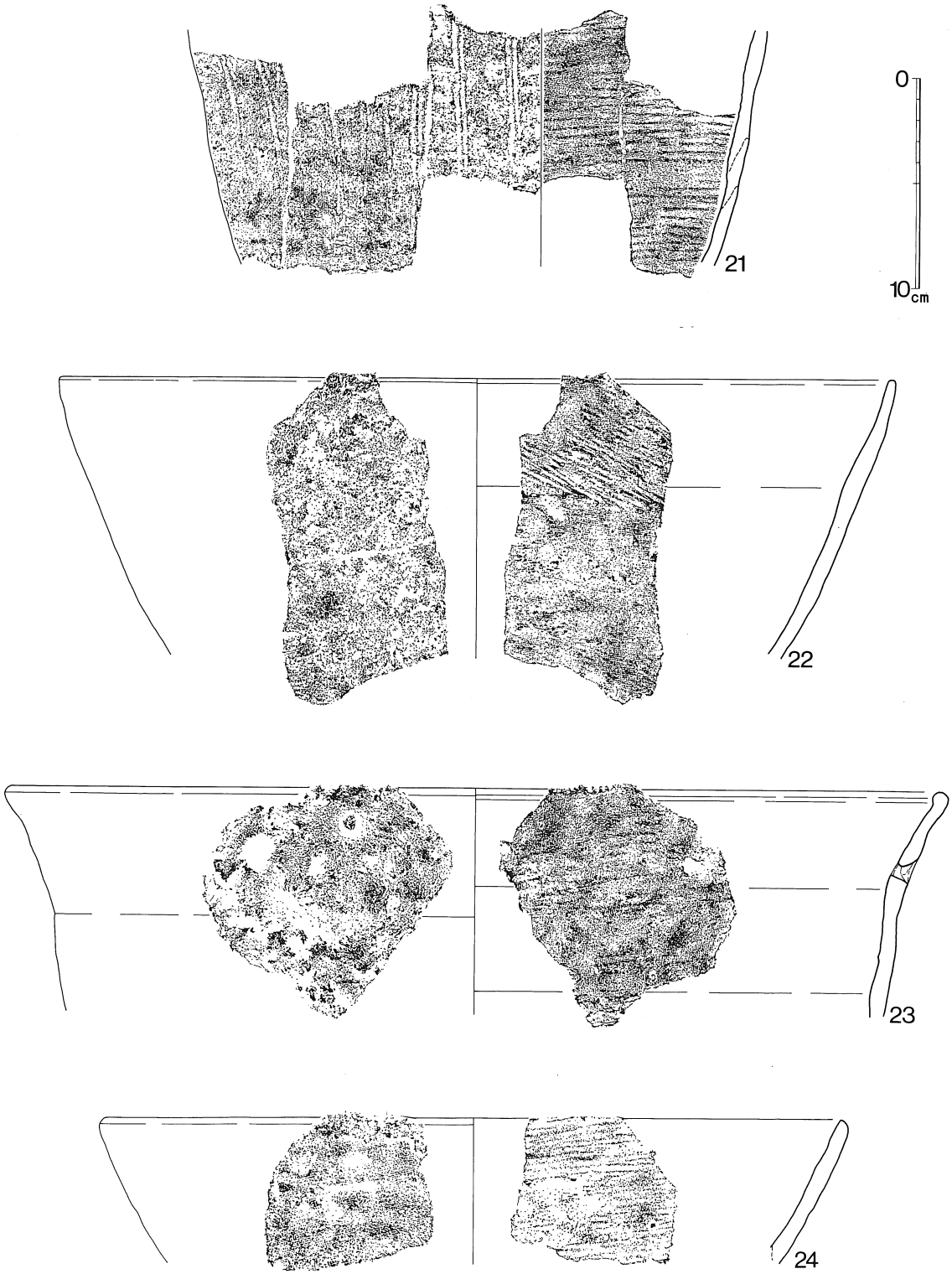


図16. 第6調査区出土遺物（3;1/3）

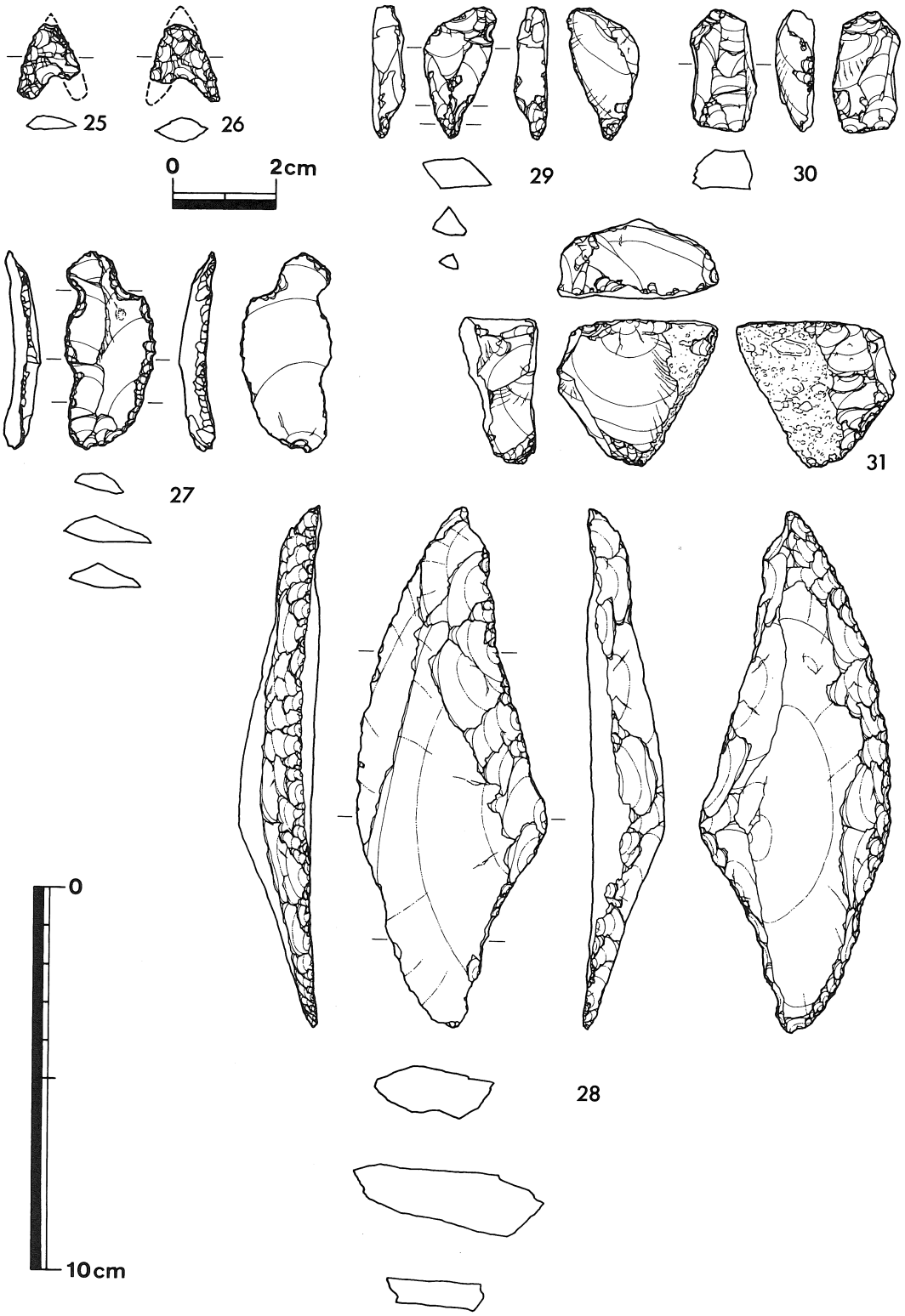


図17. 第6調査区出土遺物（4）

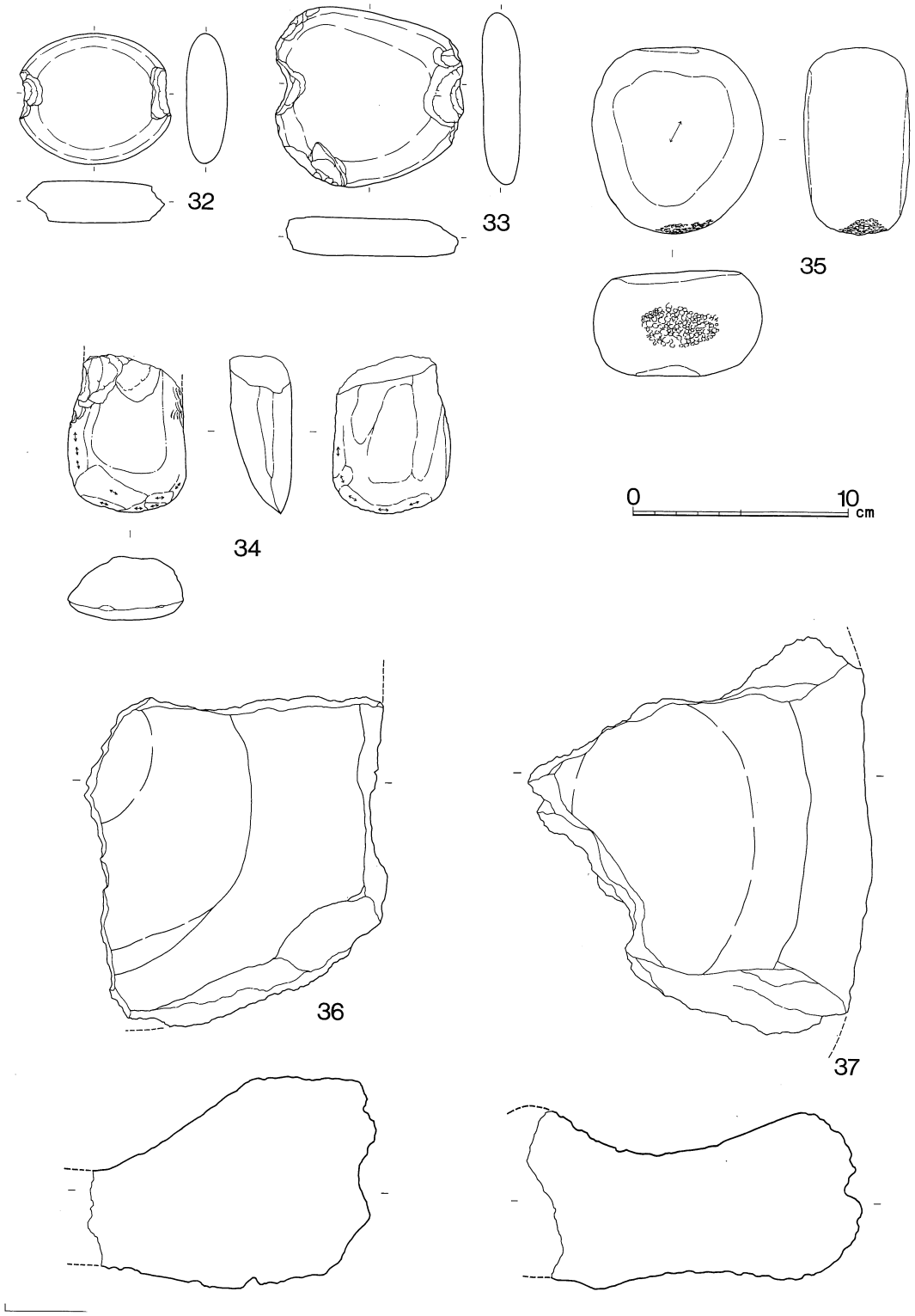


図18. 第6調査区出土遺物（5;1/3）

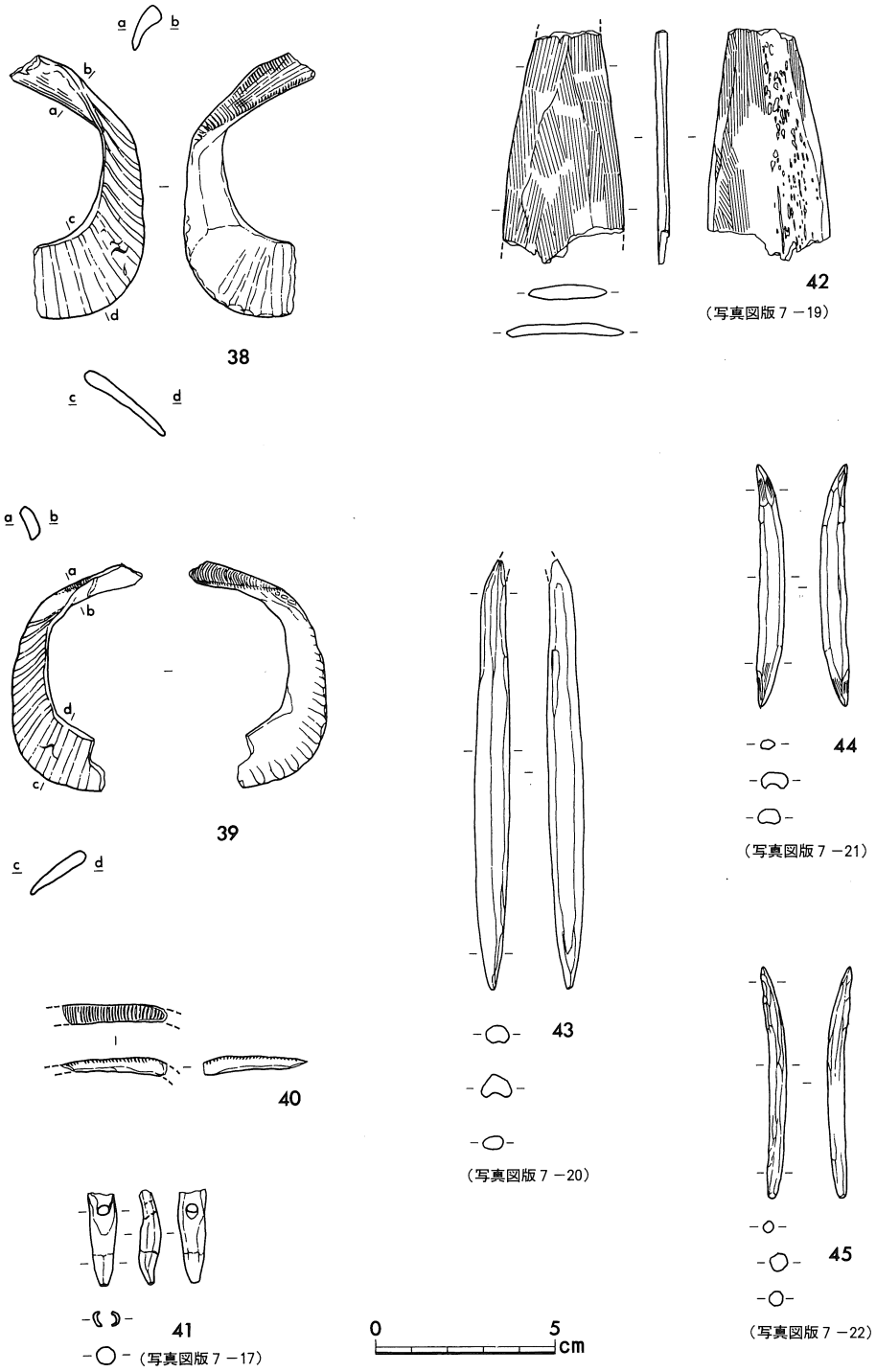


図19. 第６調査区出土遺物（6;1/2）

による研究[12]があり、分類および各土器の編年的位置付けがしめされており、その成果をもとに今回の発掘で出土した土器、さらに第6調査区貝層の時期について考えてみたい。山本によると、佐太講武貝塚の土器は、層位関係は不明であるが、(1)条痕および無文土器、(2)爪形文土器、(3)縄文地土器、(4)無節縄文土器、(5)撚糸斜格子文土器に大別されている。この内、今回の調査で第6調査区から出土した土器は、貝層以下では、(1)、(2)、(3)の土器であり、また新たな土器として、隆帯文土器5、6、沈線文土器7、21が出土した。なお、刺突文土器8については、山本の分類の(2)爪形文土器のなかにgとして刺突文も含めているが、今回出土の土器は山本が図示したものとは別種のものである。また、貝層上の暗褐色有機質土層からは、撚糸文土器が出土しているが、山本の(5)類とは別のものである。

隆帯文土器は、轟B式土器であるが、5は宮本一夫の分類のⅠa類[13]に近く、一般に西北九州から西部瀬戸内でみとめられる型式であり、山陰にも分布がおよんでいることが明らかになった。6は米子市目久美遺跡などでも同様の土器が認められ、山陰に分布する型式である。これらの土器は、貝層の下半もしくは貝層下の砂層から、2個体分が出土しており、第6調査区の貝層形成との係わりははっきりしないが、遺跡全体として見れば、前期初頭の轟B式土器の段階にも利用されたことが明らかとなった。

刺突文および爪形文土器については、山本の(2)類に共通するが、今回はa、bなどとされた貝殻施文の土器は認められなかった。山陽の羽島下層土器でも新段階の土器に併行するものと考えられ、前期前半の土器である。これらは、貝層下半の第19、21層を中心に出土しているが、9が貝層の最下部層から出土しており、これらの土器の時期が第6調査区の貝層の上限を示していると考えられる。また、11の爪形文土器は、表裏ともナデ調整で仕上げた薄手の土器であり、より新しい様相を示すものかもしれない。これは、貝層の下半でもやや上位の第17層から出土しているが、1小破片のみの出土であり、層位的傾向を示すものかどうかは明らかではない。

沈線文土器は、2個体分が認められるが、7は第20層、21は第17、18層から出土している。

二枚貝条痕もしくはナデ調整で仕上げられた土器は、山本の(1)類に共通するものであり、山本の分類に従って口唇部に刻み目があるものも含めている。口縁部の破片でみると半数近くの土器に刻み目が施されている。本類の土器は、第6調査区貝層以下から全体にわたり出土しているが、特に下半に密集する。

縄文土器は、山本の(3)類のうち、b羽状縄文のみのもの、c斜縄文のみのものに相当する。これらの土器は、貝層下半の第17、18、19、21層および第22層などから出土している。

刺突文および爪形文土器、沈線文土器、二枚貝条痕もしくはナデ調整で仕上げられた土器および縄文土器は、いずれも貝層の下半を中心に出土しており、現状では一群の土器とみておきたい。こ

れらの土器の比率は、破片による比較のため今後の変動も予想されるが、刺突文および爪形文土器8点(2%)、127.37g(1.9%)、沈線文土器2点(0.5%)、248.53g(3.7%)、二枚貝条痕もしくはナデ調整で仕上げられた土器358点(89.5%)、5763.6g(84.9%)、縄文土器18点(4.5%)、520.85g(7.7%)である。第6調査区の貝層の時期については、以上の検討からすると、上限については羽島下層式新段階併行の段階と考えられた。いっぽう下限については、土器の出土状況が貝層下半に密集し、上半では散漫で資料数も少ないため、現状では確定は難しい。あるいは貝塚の形成にともなって、土器の廃棄の場が移動している可能性も考えさせる。現在、サンプリングした貝層中の遺物の水洗選別も進んでおり、これらの成果をふまえて今後下限の問題などについて考えていきたい。

また、(1)類の条痕文土器については、山本が爪形文土器に先行する、早期末ないし前期初頭に位置付けられる単独の型式として佐太講武式を提唱している。これについては、独立した型式としては設定できず、羽島下層Ⅱ式・北白川下層Ⅰ式におけるバリエーションであり、前期初頭の土器群にははいらないとする意見[15]もでている。山本は、条痕文土器と無文土器をふくむ(1)類の土器が9割3分以上を占め、本貝塚の主体をなす土器としているが、今回の調査の結果では、(1)類の土器が貝層出土土器の破片数で89.5%、重量で84.9%を占め、山本の指摘に近い比率を示している。しかし、厳密には層位的に限定した形で比率を検討すべきであるが、現在水洗選別資料が回収されつつある状況であり、この結果をまって検討してみたい。いずれにせよ土器の集中する貝層下半に限っても、(1)類の土器が主体を占めることは明らかであり、これを爪形文土器に先行させて考えるのは無理があり、佐太講武式に検討の必要なことは確かである。いっぽうで従来佐太講武貝塚で知られていなかった、爪形文土器に先行する前期初頭の轟B式土器が出土したこと、繊維を含む土器の存在も指摘されていることからすると、爪形文土器より遡る条痕文土器および無文土器も存在していると考えられ、佐太講武式としてまとめられた土器について、時期的な細分の可能性も考慮して今後検討していきたい。

第7調査区

第6調査区北約30mに設定した5×2mの調査区で、地表の標高は1.3mである。ここでは耕作土下は、粘質土、有機土、砂質土が互層状に厚く堆積しており、貝層は認められない。堆積はわずかに北に向かって傾斜しており、第6調査区の貝層の傾斜と一致する。調査区東壁には、佐陀川護岸工事に際してのものかと考えられるコンクリートパイルが見える。

貝層は認められなかったが、調査区下底付近、標高約−15cmの灰褐色砂礫層で、縄文土器1片が出土した。この層が、貝層に対応するものと考えられ、この地点までは貝層の広がりはないものと判断する。

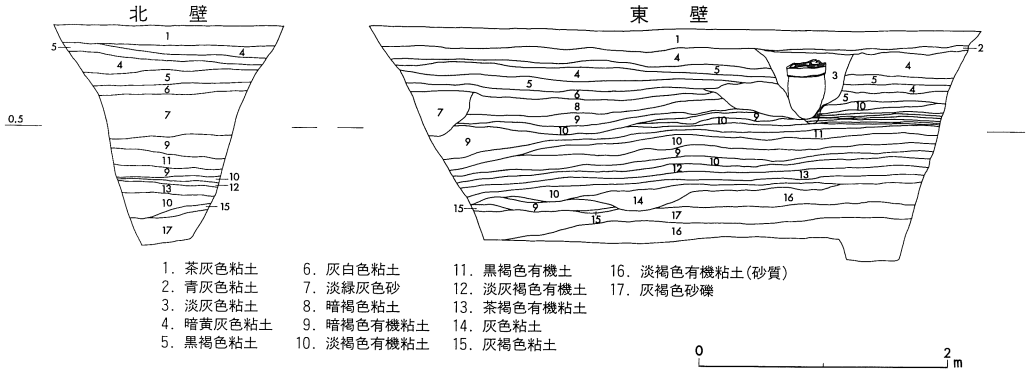


図20. 第７調査区（1/60）

縄文土器46は、深鉢の破片と考えられるもので、内外面に横方向の条痕をとどめる。

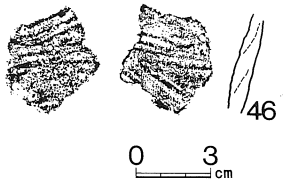


図21. 第７調査区出土遺物（1/3）

第８調査区

第７調査区西約30ｍ、丘陵下の付近の水田面よりわずかに高い地点に設定した10×２ｍの調査区で、地表の標高は4.3ｍである。耕作土下には粘質土、有機土がわずかに東に向かって傾斜しながら堆積しており、第２、３、４調査区のような佐陀川揚土は認められなかった。暗褐色、黒褐色の有機土下にある灰色粘土層中から弥生時代前期かと考えられる土器が少量出土した。

第９調査区

第６調査区の南約25ｍの佐陀川川岸に設定した５×２ｍの調査区で、地表の標高は1.6ｍである。ここでも第６調査区同様、佐陀川開削時に上層の土を搬出したらしく、調査区の西半分では耕作土

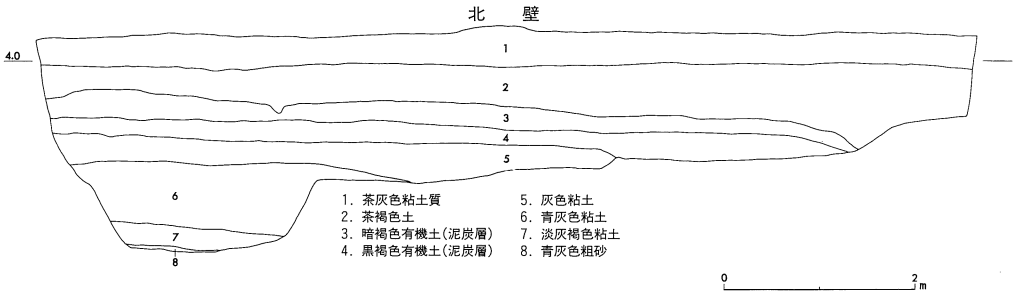


図22. 第８調査区（1/80）

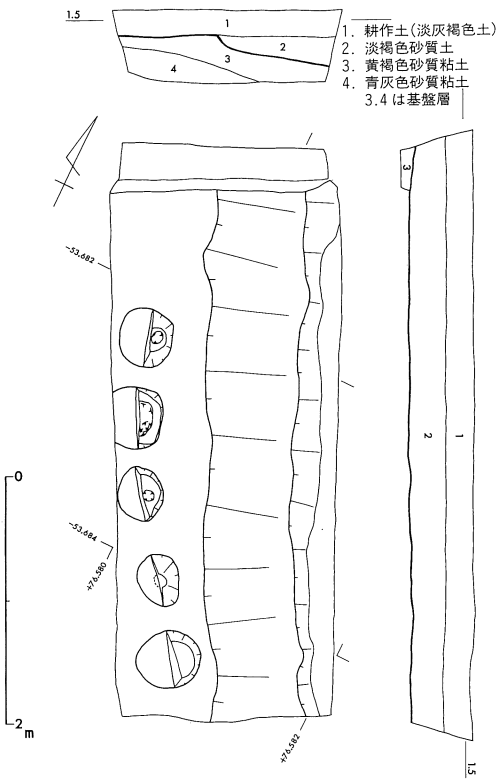


図23. 第9調査区（1/60）

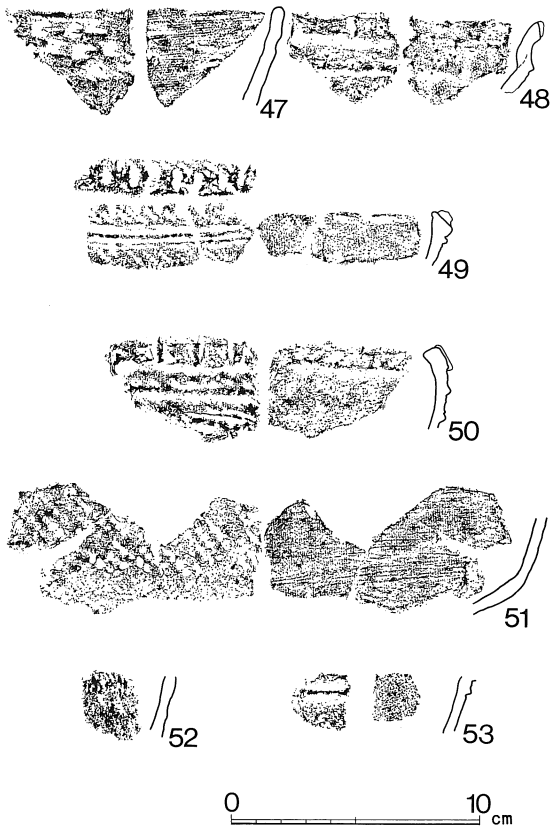


図24. 第9調査区出土遺物（1/3）

の下に基盤層があらわれた。この基盤層は、調査区東半では東に向かって下り、この傾斜上に淡褐色砂質土が堆積している。この層中に縄文時代の遺物が包含されており、わずかであるが、縄文時代の包含層が残存しているのを確認した。

なお、調査区西半で検出した5穴の柱穴状のピットは、坑中に松杭が打ち込まれていたらしく、松の樹皮が残り、杭部分が空洞となって残っていた。確言はできないが、佐陀川開削時の護岸工事のものとも考えられる。

出土遺物は、47が押し引き沈線と同様の原体を使用する口縁部で、彦崎ＺＩ式、48～51は口縁部の屈曲が複雑になる薄手の土器で里木Ｉ式、52は縄文地に刺突をもつ貼付けの突帯があり、船元Ｉ式のものと考えられる。

このように見てくると、この包含層では、縄文時代前期後半から中期初頭の土器が出土していることとなり、第6調査区よりも若干新しい遺物を包含していることとなる。土器以外には、獣骨、黒曜石剥片などが出土している。

第10調査区

第10調査区の西約35mの水田面に設定した3×2m調査区で、地表の標高は4.5mである。この調査区では佐陀川開削時の揚土は検出されていない。耕作土の下は粘質土が水平に堆積している。調査区底に近いやや暗い灰白色粘土層から弥生土器の小片が1片出土し、地表から約2mまでは縄文時代の包含層は確認できなかった。

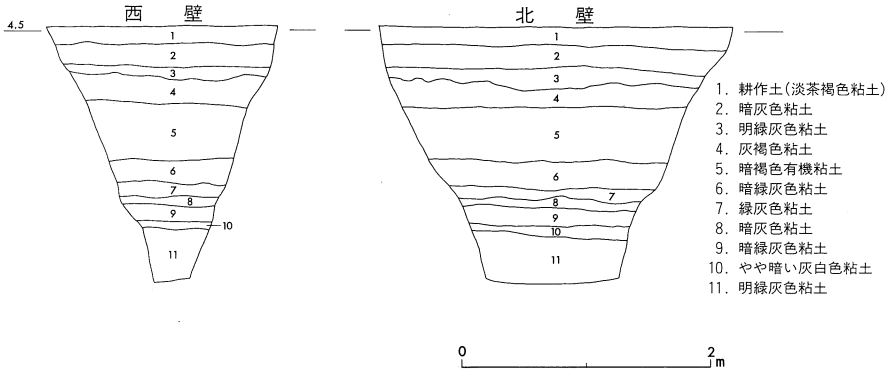


図25. 第10調査区（1/60）

第11調査区

第10調査区の西約20mの茶畑に設定した3.5×2mの調査区で、地表の標高は7.1～6.8mである。耕作土の下は地下約2mまですべて佐陀川開削時の揚土であった。この調査区からは遺物は検出されなかった。揚土は有機土、灰白色粘土、灰色粘土などで構成されており、低湿地から搬入されたものである。この結果、水田面からの比高約2.5mを測るこの畑のほとんどは、佐陀川開削時の揚土を積み上げて造成されたものと考えられる。

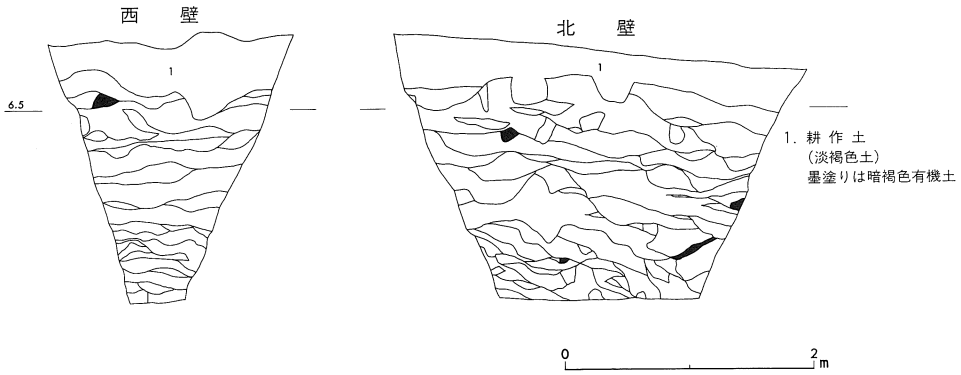


図26. 第11調査区（1/60）

注

1．山本　清「講武村内の二つの先史遺跡」（『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年）

2．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書４ 北講武氏元遺跡』 鹿島町教育委員会 1989年

3．金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」（『日本考古学年報』16 1963年）

　藤田　等「島根県 古浦遺跡」（『探訪弥生の遺跡 西日本編』 1987年）

4．山本　清「講武村内の二つの先史遺跡」（『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年）

5．『志谷奥遺跡』 鹿島町教育委員会 1976年

6．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書１ 名分塚田遺跡』 鹿島町教育委員会 1984年

　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書３ 名分塚田遺跡２』 鹿島町教育委員会 1987年

7．「南講武小廻遺跡」（『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書１』 鹿島町教育委員会 1986年）

8．『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５ 南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992年

9．『名分丸山古墳群測量調査報告書』 鹿島町教育委員会 1984年

10．『奥才古墳群』 鹿島町教育委員会 1985年

11．『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 1983年

12．山本　清「講武村内の二つの先史遺跡」（『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年）

　同　　「西山陰の縄文式文化－土器を中心として－」（『山陰文化研究所紀要』第1号 1961年）

13．宮本一夫「轟Ｂ式土器の再検討－京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に－」（『肥後考古』第7号 1990年）

14．判別の難しい土器小片を除き、貝層以下出土全土器について、種類ごとに数量と重量を集計したものである。

15．井上智博「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相－中国地方を中心として－」（『考古学研究』第38巻第2号 1991年）

Ⅳ. 出土動物・植物遺存体

内 山 純 蔵

1．報告の対象

本章では、今回の調査により現在までに検出されている動物遺存体と植物遺体について報告する。今回の調査では、第6調査区において保存状態がよく比較的撹乱を受けていない貝層が検出された。この貝層については土壌が全て採取され、水選選別とふるい選別に付された。これらの資料からは縄文時代前期当時の生業について示唆に富む遺存体が多く得られており、分析作業は継続中である。本報告では、この内①現在までに同定できた遺存体の種名と概要（2.）、②貝層の状態が良好なB区の柱状サンプル土壌の湿体積100ℓ分についての注1、魚骨を中心とする分析結果（2.(3)）、③水選選別により同定できた植物遺体の種類（3.）、の3点について記述する。層位間の比較についても分析を急いでいるが、次の機会に譲りたい。

2．出土動物遺存体の概要

(1)検出・同定された種

現在までに同定できた種は以下のとおりである。

軟体動物門　PHYLUM MOLLUSCA
- 腹足綱　Class Gastropoda
  - 原始腹足目　Order Archaeogastropoda
    - ミミガイ科　Family Haliotidae
      - クロアワビ　*Notohaliotis discus*
    - ユキノカサガイ科　Family Acamaeidae
      - ヒメコザラガイ　*Ptelloida* (*Chiazacmea*) *pygmaea*
    - ニシキウズガイ科　Family Trochidae
      - クボガイ　*Chlorostoma lischkei*
    - リュウテンサザエ科　Family Turbinidae
      - サザエ　*Turbo* (*Batillus*) *cornutus*
  - 新腹足目　Order Neogastropoda
    - アクキガイ科　Family Muricidae
      - レイシガイ　*Thais bronni*
- 斧足綱　Class Bivalvia
  - 糸鰓目　Order Filibranchia
    - オオシラスナガイ科　Family Limopusidae
      - ベンケイガイ　*Glycymeris* (*Veletuceta*) *albolineata*
    - イガイ科　Family Mytilidae
      - イガイ　*Mytilus coruscum*

注1　B区の貝層土壌は全体で12.5ℓ入り土のう袋80袋分（計1000ℓ）であり、この内、500ℓを柱状サンプルとし、残る500ℓを層位別に採取した。柱状サンプルには、貝層上面から5㎝おきにB1～B8の番号を振った。今回分析した100ℓは、B1～B8それぞれから土のう1袋ずつ無作為に抽出して行った。

真弁鰓目　Order Eulamellibranchia
シジミガイ科　Family Corbiculidae
ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
マルスダレガイ科　Family Veneridae
ハマグリ　*Meretrix lusoria*
脊椎動物門　PHYLUM VERTEBRATA
軟骨魚綱　Class Chondrichthyes
サメ類の１種　*Selachii fam. et gen. indet.*
エイ目　Ordes Rajifones
アカエイ科　Family Dasyatididae
アカエイ　*Dasyatis akajei*
硬骨魚綱　Class Osteichthyes
ニシン目　Order Clupeiformes
イワシの１種　*Clupeiformes fam. indet.*
コイ目　Order Cypriniformes
コイ科　Family Cyprinidae
コイ科の１種　*Cyprinidae gen. et sp. indet.*
コイ　*Cyprinus sp.*
フナ　*Carassius sp.*
ナマズ目　Order Siluriformes
ナマズ科　Family Siluridae
ナマズ科の１種　*Siluridae gen. et sp. indet.*
スズキ目　Order Perciformes
タイ科　Family Sparidae
タイ科の１種　*Sparidae gen. et sp. indet.*
クロダイ　*Acanthpagras schlegeli.*
イシダイ科　Family Oplegnathidae
イシダイ　*Oplegnathus fasciatus*
ベラ科　Family Labridae
コブダイ（カンダイ）　*Semicossyphus reticlatus*
サバ科　Family Scombridae
サバ科の１種　*Scombridae gen. et sp. indet.*
ハゼ科　Family Gobiidae
ハゼ科の１種　*Gobiidae gen. et sp. indet.*
哺乳綱　Class Mammalia
霊長目　Order Primates
オナガザル科　Family Cercopithecidae
ニホンザル　*Macaca fuscata*
ヒト科　Family Homonidae
ヒト　*Homo sapience sapience*
ウサギ目　Order Lagomorpha
ネズミ科　Family Muridae

ネズミ科の１種　*Muridae gen. et sp. indet.*

食肉目　Order Carnivora

イヌ科　Family Canidae

タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*

イヌ　*Canis familiaris*

イタチ科　Family Mustelidae

アナグマ　*Meles meles*

偶蹄目　Order Artiodactyla

イノシシ科　Family Suidae

イノシシ　*Sus scrofa*

シカ科　Family Cevidae

ニホンジカ　*Cervus nippon*

（２）貝類の概要

今までに９種類が同定できた。各種それぞれの生息域を表１に示した。この表に示されるように、佐太講武貝塚出土の貝類相の第一の特徴は、サザエやアワビなど外海に面した岩礁・深場に生息するものから、汽水域を生息域とするヤマトシジミまで、広範囲の環境から採集されたもので成り立っている点である。この内、ヤマトシジミが大部分を占め、貝類採集の主体となっている。今回、層位別サンプルの土のう１袋分（Ｂ区２層）について、種別の重量比を算出したが、それによると、貝類全体1779ｇ中、ヤマトシジミが1750ｇ（98.4%）、サザエとイガイがともに14ｇ（0.8%）、不明15ｇ（0.8%）となり、ヤマトシジミが圧倒的多数を占める貝塚の状況を代表している。

表１．出土貝類の生息域

種名	生息域	出土量
ヤマトシジミ	汽水	◎
ハマグリ	内湾・潮間帯	
イガイ	岩礁・潮間帯	○
ヒメコザラガイ	岩礁・潮間帯	
クボガイ	岩礁・潮間帯	
レイシガイ	岩礁・潮間帯	
クロアワビ	岩礁・深場	○
サザエ	岩礁・深場	○

次に、Ｂ地区の層位別資料500ℓ（土壌体積）分のヤマトシジミについて、殻長分布を調べ（表２）グラフ化して図１に示す。これによると、層位の違いにより、殻長分布のピークに18～22㎜のものと、24～28㎜のものとがある。この要因が採集環境や選択、埋存条件などいずれにあたるのかについては、今後他の遺存体の量比などと比較しつつ考察する必要がある。

表２．Ｇ６Ｂ区層位別資料ヤマトシジミ殻長分布
（表中、各層に対応する数字は個数を表わす）

殻長（$^{3}/_{0}$）＼層	５層	９層	１２層	１３層	１４層	１６層	１７層	２０層
～10	0	3	5	9	4	0	4	0
～12	0	0	4	9	10	2	1	0
～14	2	8	10	9	35	5	16	0
～16	7	21	19	24	126	7	24	1
～18	10	35	23	50	329	17	38	0
～20	19	67	43	101	275	52	70	0
～22	35	125	78	155	237	45	85	1
～24	68	138	69	94	256	53	66	1
～26	38	147	69	95	119	108	58	0
～28	38	114	60	42	129	124	52	0
～30	26	93	74	28	67	76	34	0
～32	12	55	52	16	26	40	29	0
～34	4	24	32	9	6	16	11	0
～36	0	10	20	3	2	2	8	0
～38	0	2	3	0	1	1	5	0
～40	0	1	0	0	1	0	0	0
40～	0	0	0	0	0	0	0	0
合計（個）	259	843	561	644	1623	548	501	3
ｼｼﾞﾐ全重量（ｇ）	8893	16476	9181	6682	16998	12187	3869	80
破砕貝比（重量%）	96.053075	92.030833	76.582072	86.501048	70.13178	93.090999	85.577669	91.25

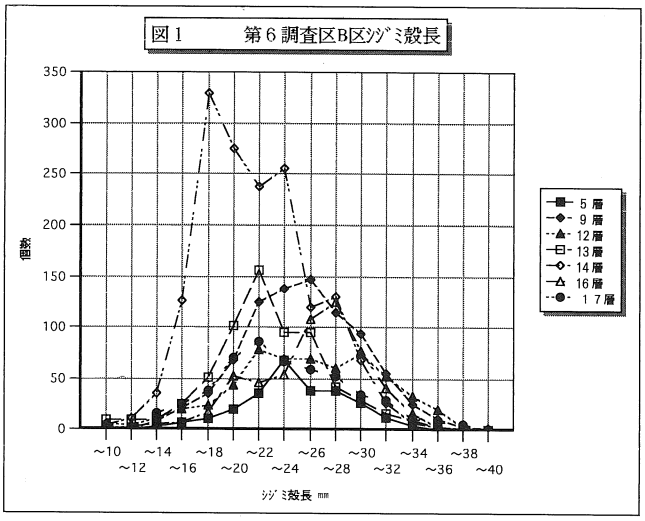


表3．G6B区ふるい選別資料魚骨集計表
（柱状サンプル100ℓ中）

種名	骨片数(点)	%(対骨片総数)	最小個体数
(淡水魚)			
コイ科	148	48.37	2
フナ	82	26.8	3
コイ	1	0.33	1
ナマズ	1	0.33	1
小計	232	75.87	7
(その他)			
タイ類	66	21.57	1
クロダイ	2	0.65	1
ハゼ	2	0.65	1
イワシ類	2	0.65	1
イシダイ	1	0.33	1
サバ	1	0.33	1
小計	74	24.17	6
総数	306	100	13

（3）魚類の概要

魚類については、11種が同定できた。魚骨からも、外海から淡水域までの広い範囲が漁撈活動の場となっていたことがわかる。イシダイやコブダイは外海岩礁域、クロダイは内海から汽水域、コイ科やナマズ科については淡水域で捕獲されたと推定できる。また少数ながら、アカエイ、イワシ、サバ、ハゼも同定できた。

ふるい選別の結果を集計して表3に示す。ここに示されたように、淡水魚の割合が最も高く（骨片数にして75.9%注2）、漁撈の主な対象となっている。

淡水魚の中ではコイ科が多数を占める。とくに椎骨が数多く、大きさも体長40cm程度のものを最大として、様々である。

海水魚では、タイ類が多数を占めた。そのほとんどは遊離した歯の出土である。これらは主に、歯骨が出土しているクロダイやイシダイのものであろう。

（4）哺乳類の概要

貝類と魚類以外で同定できたのは、哺乳類ばかり8種である。このなかでは、イノシシが目立って多い。こうした様相は、他の西日本の貝塚でも多くみられる。次いでニホンジカが多い。ニホンジカの角や中手・中足骨は漁撈用骨角器の素材として重要である。この貝塚でもこれらを素材としたとみられる単純刺突具（いわゆるヤス）が多く出土している。ニホンジカの捕獲は素材確保の意味でも重要であったはずである。

B区では、現場での取り上げ資料から43点がイノシシまたはニホンジカと同定できたが、この内イノシシは25点、ニホンジカは11点であった。最小個体数にすると、イノシシは今日橈骨（左）で2個体、ニホンジカは脛骨（左）で1個体となり、ほぼイノシシがニホンジカの2倍出土したことになる。また、写真に示したが、現場取り上げのニホンジカ（メス）の頭蓋に、後頭部を縫合線に沿って離断されたものがある。脳髄は、食用になるほか、皮なめしにも用いることができる。

注2　この数値にはフナの鰓蓋骨または頭蓋骨の断片と考えられる破片を除いてある。フナの骨表面の独特の突起のため、この部分は非常によく目につき、かつ断片になりやすい。数値の正確さを期するための措置である。

表４．イヌ頭蓋骨計測表（ミリ）

	項目	計測値	タテチョウ
1	頭蓋最大長	145.2	153.6
2	基底全長	137.8	146.4
3	頭蓋基底長	130	139.4
4	硬口蓋長	72.5	74.7
5	硬口蓋最大幅	49.9	56
6	頭蓋幅	49.7	50.4
7	頬骨弓幅	80	98.2
8	両耳幅	53	58
9	脳頭蓋長	78.8	82.6
10	バジオン・ブレグマ長	44.5	52.4
11	最小前頭幅	28.8	32
12	前頭頬骨突起端幅	37.8	47.3
13	後頭最大高	38.2	41.5
14	後頭三角幅	55.5	57.7
15	最小眼窩間幅	27.1	31
16	顔長	73.8	74
17	頭骨指数(7/1×100)	55.09641873	63.93229167

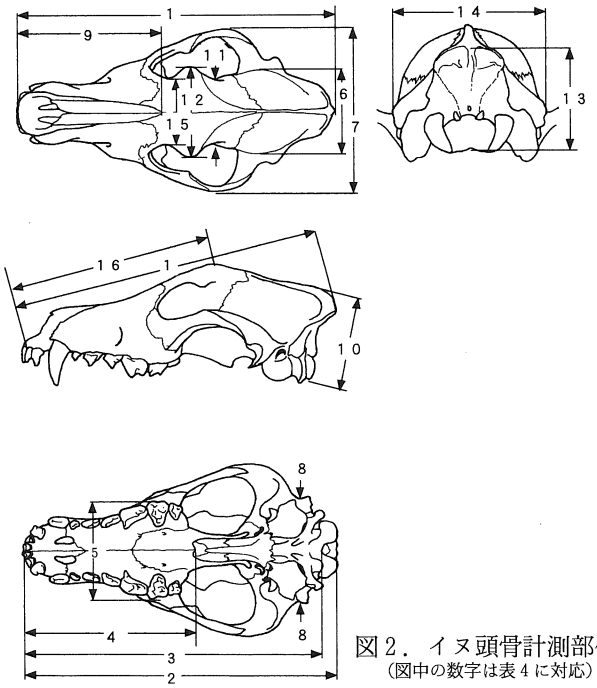


図２．イヌ頭骨計測部位
（図中の数字は表４に対応）

サルやタヌキ、アナグマなども出土している。また、イヌの完形に近い頭蓋が出土した。頭頂部に横位の切痕が認められる。こうした例は縄文時代には珍しい。イノシシやニホンジカにも切痕のあるものがあったが、Ｂ区の現場取り上げ資料に限っていえば43点中４点であり、いずれも関節付近で横位の切痕なので、解体の際についた傷と解釈できる。なお43点中３点にイヌなどの食肉目による噛り痕がみられた。

イヌの頭蓋については、サイズを計測し、松江市のタテチョウ遺跡から出土している、ほぼ縄文晩期から弥生中期に比定できるもの（金子．1987）と比較した（表４．計測点は図２）。西日本に多い小型犬の範囲に入るものである。タテチョウのものに比べて、（１）頭骨指数（頬骨弓幅／頭骨最大長×100）は小さく、（２）前頭から吻部へのつながりも直線的で、全体として丸みの少ない縄文犬の特徴を、より色濃く有しているといえよう。

ヒトも出土している。この鑑定を担当した京都大学理学部人類学教室博士課程の五十嵐由里子氏によると、大腿骨（左）であるが、骨端の形成がみられないので、胎児または新生児と考えられる。現在のところ出土地点付近からは他の部分は出土しておらず、この位置に埋葬があったとは考えにくい。

３．植物遺体

貝塚は低湿な環境下に保存されていたので、多くの植物遺体を含んでいる。これらは水洗選別により検出・保存され、現在までに19種類の種実が同定されている。同定は同志社大学文学部の道岸史子氏が行った。

同定されたものの名称を学名とともに記すと、以下のとおりである。

被子植物門　PHYLUM ANGIOSPERMAE

双子葉植物綱　Class Dicotyledoneae

クルミ目　Order Juglandales
　クルミ科　Family Juglandaceae
　　サワグルミ　*Pterocarya rhoifolia*
イラクサ目　Order Urticales
　クワ科　Family Moraceae
　　ヒメコウゾ　*Broussonetia kazinoki*
タデ目　Order Polygonales
　タデ科　Family Polygonaceae
　　タデ属の１種　*Polygonum sp. indet.*
キンポウゲ目　Order Ranales
　モクレン科　Family Magnoliaceae
　　コブシ　*Magnolia kobus*
　　ホオノキ　*Magnolia obovata*
バラ目　Order Rosales
　バラ科　Family Rosaceae
　　フユイチゴ　*Rubus Buergeri*
フウロウソウ目　Order Geraniales
　ミカン科　Family Rutaceae
　　カラスザンショウ　*Xanthoxylum ailanthoides*
　トウダイグサ科　Family Euphorbiaceae
　　アカメガシワ　*Mallotus japonicus*
側膜胎座目　Order Parietales
　サルナシ科　Family Actinidiaceae
　　サルナシ　*Actinidia arguta*
　　マタタビ　*Actinidia polygama*
　ツバキ科　Family Theaceae
　　サカキ　*Cleyera japonica*
　スミレ科　Family Violaceae
　　スミレ属の１種　*Viola sp. indet.*
　キブシ科　Family Stachyuraceae
　　キブシ　*Stachyurus praecox*
傘形花目　Order Umbelliflorae
　ミズキ科　Family Cornaceae
　　クマノミズキ　*Cornus macrophylla*
管状花目　Order Tubiflorae
　ナス科　Family Solanaceae
　　ナス属の１種　*Solanum sp. indet.*
アカネ目　Order Rubiales
　スイカズラ科　Family Caprifoliaceae
　　ニワトコ　*Sambucus racemosa*
単子葉植物綱　Class Monocotyledoneae
　沼生目　Order Helobiae

ヒルムシロ科　Family Potamogetonaceae

イトモ　*Potamogeton prsillus*

頴花目　Order Glumiflorae

カヤツリグサ科　Family Cyperaceae

ホタルイ属の１種　*Scirpus sp. indet.*

スゲ属の１種　*Cyperus sp. indet.*

４．動物・植物遺存体の所見～生業活動の範囲と遺存状況～

佐太講武貝塚では、貝類ではヤマトシジミ、魚類ではコイ科など淡水魚が主体を占める。遺跡の周辺、とりわけ東方の現水田地や宍道湖方面の地域には、当時は海水が進入し、広範な汽水・淡水域が存在したとみることができるから、当時の漁撈の活動領域は、貝塚周辺の低湿な環境に集中していたと推定できる。一方で、外海岩礁域に生息する種も出土しており、当時の漁撈がきわめて広範囲にわたって展開していた点にも注意すべきである。捕獲に際しては、数多く出土している石錘と単純刺突具（いわゆるヤス）が重要な手段となっていたのであろう。

当時の貝塚周辺には水鳥など鳥類も多く生息したはずだが、今回は鳥類の遺存体はみられなかった。このことは、一見、鳥類が多くなる冬期に貝塚を中心とした生業活動が不活発であったことを反映しているともみえるが、鳥類の骨は元来、構造上脆弱で、調理に際して骨ごとつぶして用いられたり、イヌが噛み砕いてしまったりして遺存しにくい場合があり、さらに貝塚の形成過程をも考慮するべきであるので、即断はできない。

今回の調査資料では、鳥類がないばかりでなく、哺乳類の遺存体のなかでも指骨や手根・足根骨といった小型の骨が少ない傾向がある。この一方で、魚類では淡水魚などの小さな骨まで良く遺存している。このように、魚骨とその他の動物遺存体とでは遺存状況に違いがある。この事実は、これら二者が廃棄の過程で異なった扱いを受けていたことを示しているのではなかろうか。同様の現象が他の遺跡でもみられるのか、興味深い問題である。

植物遺体に関しては、同定されたもののうち、少なくともフユイチゴ、カラスザンショウ、サルナシ、マタタビ、ニワトコは食用として利用可能である。またホオノキとアカメガシワはその葉で植物を包んだり、盛ったりするのに利用できる。この他、イトモやホタルイ属などは、沼沢などの湿地に生える種であり、貝塚形成時の周辺の環境が低湿なものであったことを示唆する資料である。今回は種を同定できなかったが、この他にも多量の堅果類の破片があったことを付け加えておく。

西日本の日本海側には、潟（ラグーン）の環境が多く分布しており、その周辺には、多くの低湿地遺跡が存在する。漁撈活動をはじめ、同様の立地条件の佐太講武貝塚にみられるような生業のタイプが、これらの遺跡でもみることができるか、今後考察していきたい。

最後に、お教えを下さった奈良国立文化財研究所の松井　章先生と、貝類に関して奈良大学大学院学生の澤田　勝さんと滋賀県文化財保護協会の瀬口眞司さん、植物遺体の同定に関して同志社大学学生の道岸史子さん、人骨の同定に関して京都大学大学院学生の五十嵐由里子さんに助言いただいたことを感謝申し上げる。

参考文献：

大泰司紀之1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13号: 51-73頁

金子浩昌　1987「タテチョウ遺跡第２次調査出土動物遺存体」（島根県教育委員会1987『朝酌川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』所収207-218頁）

島根県八束郡鹿島町教育委員会 1993『佐太講武貝塚発掘調査報告書』

V. 小　結

今年度の調査では、大字佐陀宮内の史跡指定地を中心に調査区を設定した。このうち、第6調査区では、貝塚貝層本体を検出し、佐陀川西岸に貝層が良好に残存していることが確認できた。貝層はヤマトシジミを主体とし、北に向かって傾斜する緩斜面に形成されている。また、第5、第7、第9調査区では前後する時期の包含層を検出して、貝層だけにとどまらない遺跡の状況がわずかずつではあるが明らかになってきた。

第6調査区の縄文土器では、貝層下半もしくは貝層下から轟B式の土器が出土し、少なくとも縄文時代前期初頭には、周辺で人々の生活が始まり、明らかな貝層中の土器では、最下層で山陽の羽島下層式土器新段階のものが出土し、少なくとも調査地点での貝層はこの時期を上限とするようである。また、この土器などとともに従来佐太講武式と称されることもあった条痕文土器も出土しており、佐太講武式として設定された土器について、今後の検討が必要となってきた。一方、第9調査区では、前期後半から中期初頭の土器が出土しており、こうした時期に対応する貝層も地点を変えて存在する可能性がある。

第6調査区貝層中の貝、土壌はすべて搬出し、調査と並行して水洗選別を開始しており、第Ⅳ章で報告したとおり、当時の食生活、環境など、数多くの知見がもたらされつつある。今後の整理において貴重なデータが得られるものと期待される。

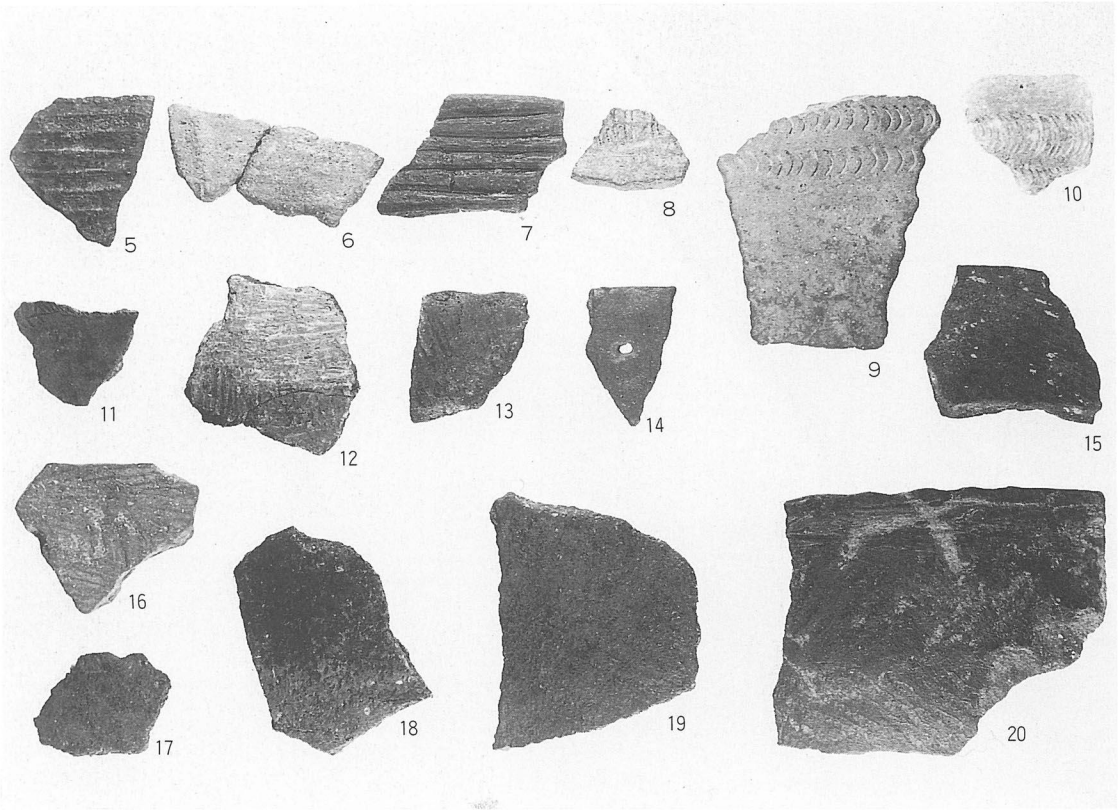
また、今年度の調査でも、佐陀川開削時の揚土が検出されている。昨年度の調査結果知見と同様に、揚土は佐陀川至近の地点ではなく、約40～50m以上離れた地点まで、運搬されている。特に丘陵斜面にある第2調査区では、揚土搬入以前に地山を削って、良好な土砂を搬出し、その跡地に揚土を搬入している様子が観察できた。また、水田面では、揚土搬入以前の旧耕作土が確認されておらず、揚土の搬入にあたっては、耕作土が一時的に除去され、搬入後に復旧するという工事が行なわれている可能性がある。

昨年度および今年度の調査結果を総合すると、佐太講武貝塚は、江戸時代の佐陀川開削によってかなり地形の改変を受けながらも、大字佐陀宮内側で良好な状態で残存していることを確認した。調査地点で貝層は、縄文時代前期初頭ないし前半に形成が始まり、少なくとも貝層上面をおおう暗褐色有機土層中に縄文時代中期の土器を含むことから、この時期までには貝層の形成は終了しているものと考えられる。貝層の周辺部では、第5、第9調査区のような状態で、包含層がさらに埋蔵されているものと考えられ、貝塚およびそれをとりまく集落の復元について貴重な手がかりが得られた。

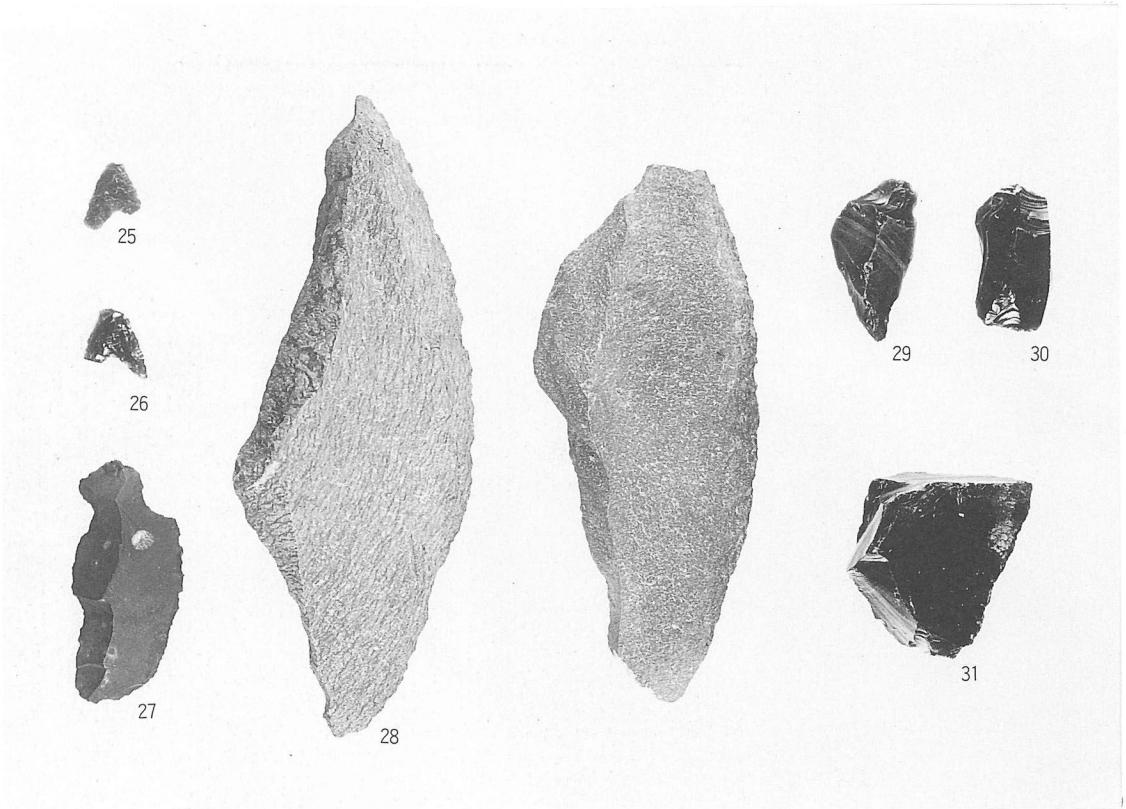
図　　版

第 6 調査区貝層（南東から）

第 6 調査区貝層（北西から）

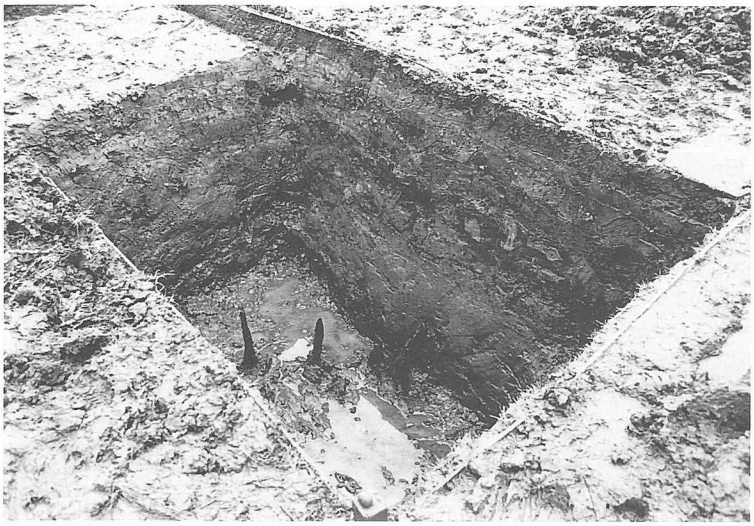


第 6 調査区出土土器

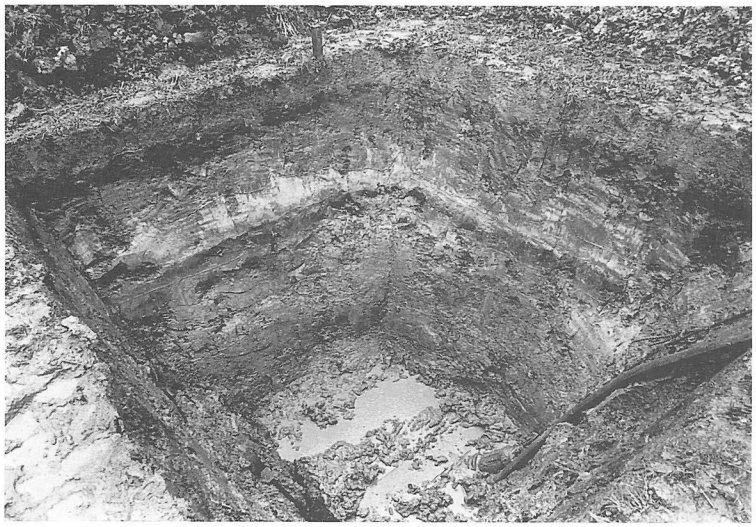


第 6 調査区出土剥片石器

第 2 調査区
（東から）

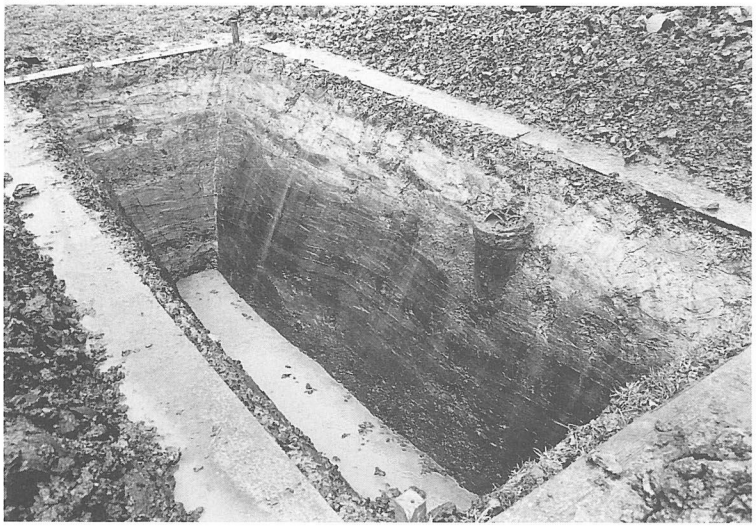


第 4 調査区
（南東から）



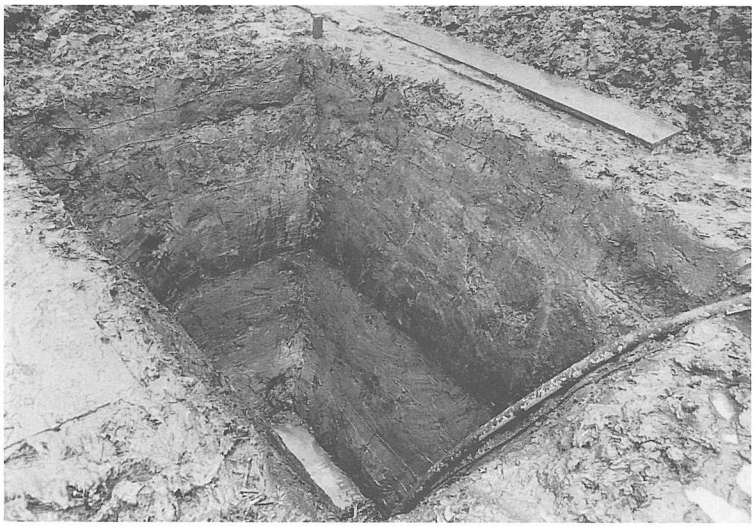
第 5 調査区
（南東から）

図版 4



第７調査区
（南から）

第９調査区
（北西から）

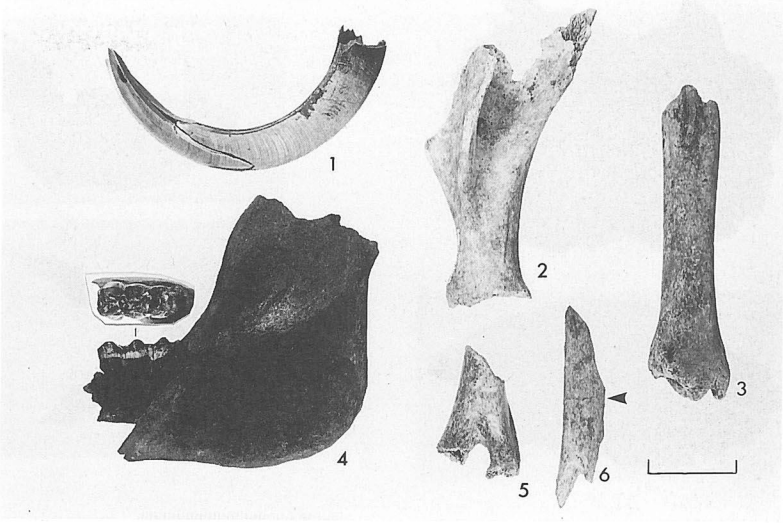


第10調査区
（南東から）

出土イノシシ

1　イノシシ犬歯(1235)／右、オス。
2　イノシシ肩甲骨(627)／左。間接部最大前後幅36.6㎜。
3　イノシシ脛骨(461)／右、遠位部。遠位端最大横径32.3㎜。
4　イノシシ下顎骨(916)左。下顎枝とM3まで残る。M3の摩耗度は＋。M3長36.8㎜。下顎枝上部はイヌによるとみられる噛み痕が多数あって、欠損している。
5　イノシシ上腕骨(596)／左、遠位部。前面外側に横位の切痕がある。
6　イノシシ橈骨(1229)／左、中位部。前面横位（矢印）に切痕が認められる。

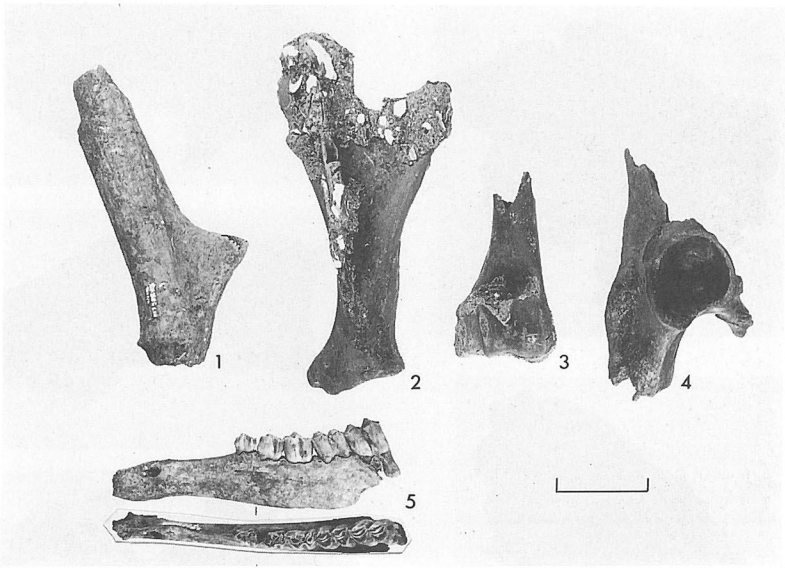
（　）内は登録番号。スケールは4㎝。



出土ニホンジカ

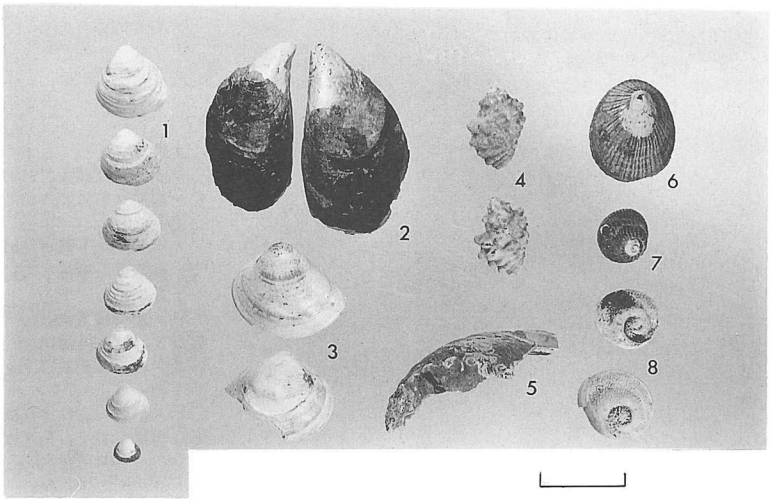
1　ニホンジカ角(50)／右。角坐部の内側から打撃を加え、切断されている。角幹部の先端の外側に横位の切痕が残る。第1枝は取り去られている。
2　ニホンジカ肩甲骨(734)／左。間接面最大前後幅46.5㎜。
3　ニホンジカ上腕骨(1086)／右・遠位端。間接面最大横径47.2㎜。
4　ニホンジカ寛骨(140)／右・間接部。間接面最大径47.0㎜。
5　ニホンジカ下顎骨(45)／左。吻端からM2まで残存。P2～P4長36.1㎜、M1～M2長33.4㎜。大泰司(1980)の基準に従えば4～7.5歳の成獣である。

（　）内は登録番号。スケールは4㎝。

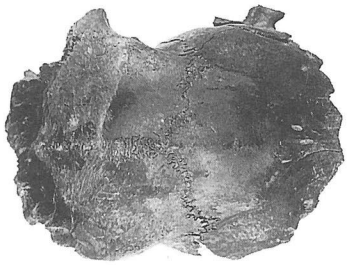


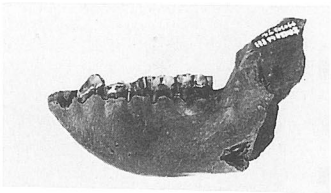
出土貝類

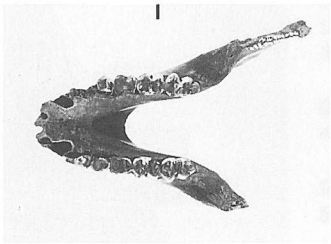
1　ヤマトシジミ
2　イガイ
3　ハマグリ
4　レイシ
5　クロアワビ
6　ユキノカサガイ
7　クボガイ
8　サザエ（蓋）

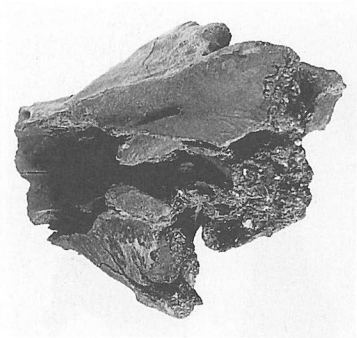


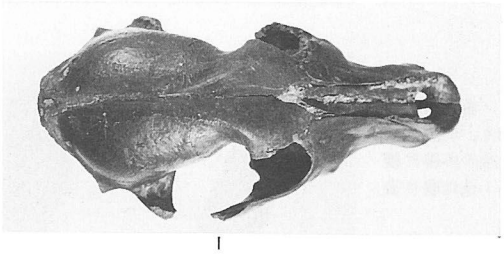
スケールは4㎝。

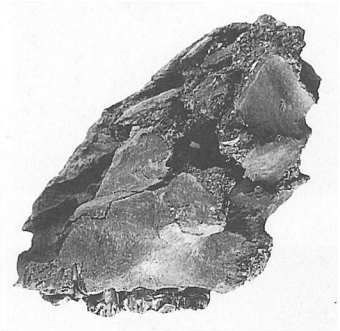


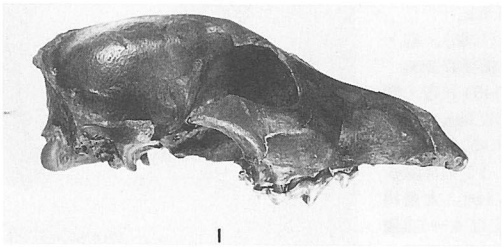


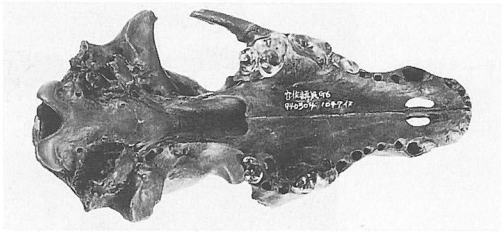


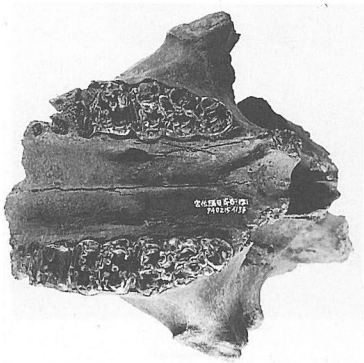












上左：

ニホンジカ頭蓋(1210)／メス、頭頂部。後頭部の左側が縫合線に一部沿ってはずされている（矢印）。

上右：

ニホンザル下顎骨(883)／P3～P4長14.6㎜、M1～M3長28.4㎜で、歯はよく摩耗している。

下左：

イノシシ頭蓋(121)／吻端部と後頭部の一部を欠く。大臼歯が残存し、摩耗度はM1＋＋＋、M2＋＋、M3＋。右側のM2とM3の長さはそれぞれ22.7㎜、35.2㎜。蓋の推定最大長36.2㎝。

下右：

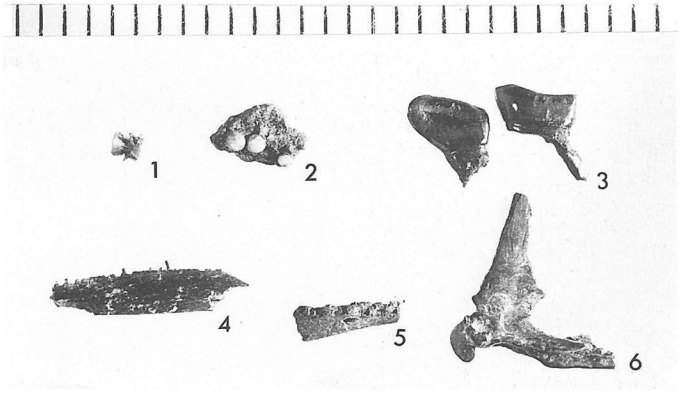
イヌ頭蓋(1047)／ほぼ完形。頭頂部に横位に何ヵ所か切痕がある。吻端が長く、縄文犬の特徴をよく保っている（表４）。

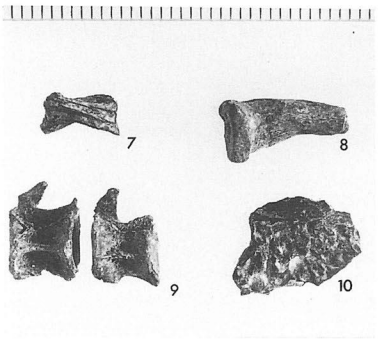
（　）内は登録番号。

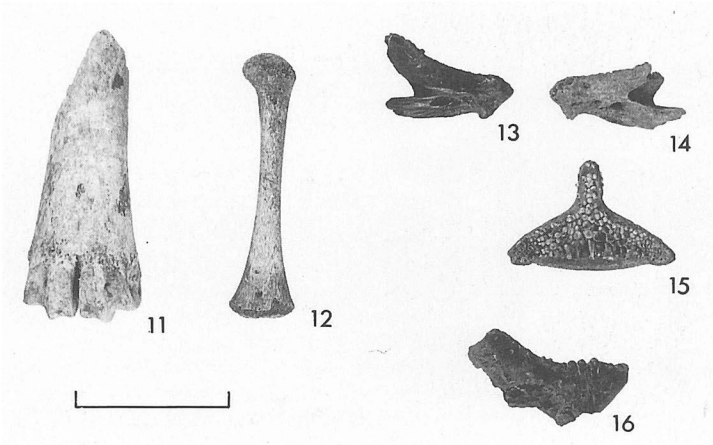
スケールは４㎝。

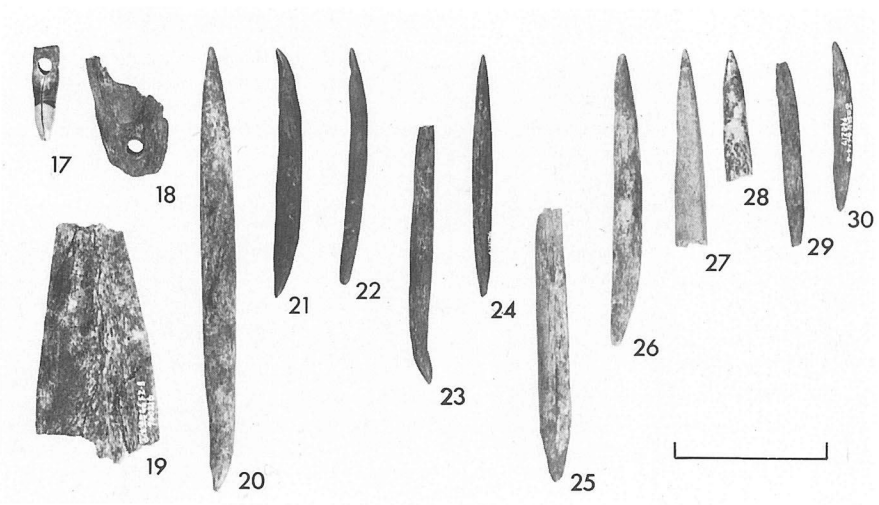
魚骨（目盛り間隔１㎜）

1　イワシ類椎骨(Ｂ２区)。
2　イシダイ歯骨または前上顎骨片(Ｂ２区)。
3　フナ咽頭歯(Ｂ７区)。
4　サバ前上顎骨(Ｂ４区)／左。
5　ハゼ歯骨(Ｂ７区)／右。
6　コイ科方骨(Ｂ６区)／左。
7　コイ科歯骨(Ｂ１区)／左。
8　ナマズ胸鰭棘(Ｂ４区)／右。間接面最大幅6
　最大体長34㎝程か。
9　コイ科椎骨(Ｂ７区)。
10　フナ主鰓蓋骨(Ｂ７区)／左。
（　）内は出土地点を示す。









動物遺存体（その他）

11　ニホンジカ中手骨(253)／左、遠位部。骨角器の素材として重要である。
12　ヒト大腿骨(Ｇ区)／左。新生児または胎児のもの。
13　クロダイ歯骨(17層　Ａ10区)／右。先端部の大きさからして最大体長約45.6㎝。
14　クロダイ歯骨(1154)／左。先端部の大きさからして推定最大体長46.8㎝。
15　コブダイ下咽頭骨(1122)／歯板部の最大幅44.2㎜であることから推定して、最大体長74.5㎝程のものである。
16　イシダイ歯骨(1190)／右。
（　）内は登録番号・出土地点を示す。
スケールは４㎝。

骨角加工部

17　(G6－1)コブダイの歯根部に穿孔している。
18　(D8－2、06層)イノシシ肩甲骨（左）(?) の頚部を切り出して穿孔している。
19　(F2－3)鹿角の角幹部先端を半截、両面を研磨している。
20～30　単純刺突具（いわゆるヤス）
（　）内は登録番号・出土地点を示す。
スケールは４㎝。

佐太講武貝塚発掘調査報告書 2

１９９４年3月

発行　鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷　株式会社　報　光　社